

余市町

登川右岸遺跡

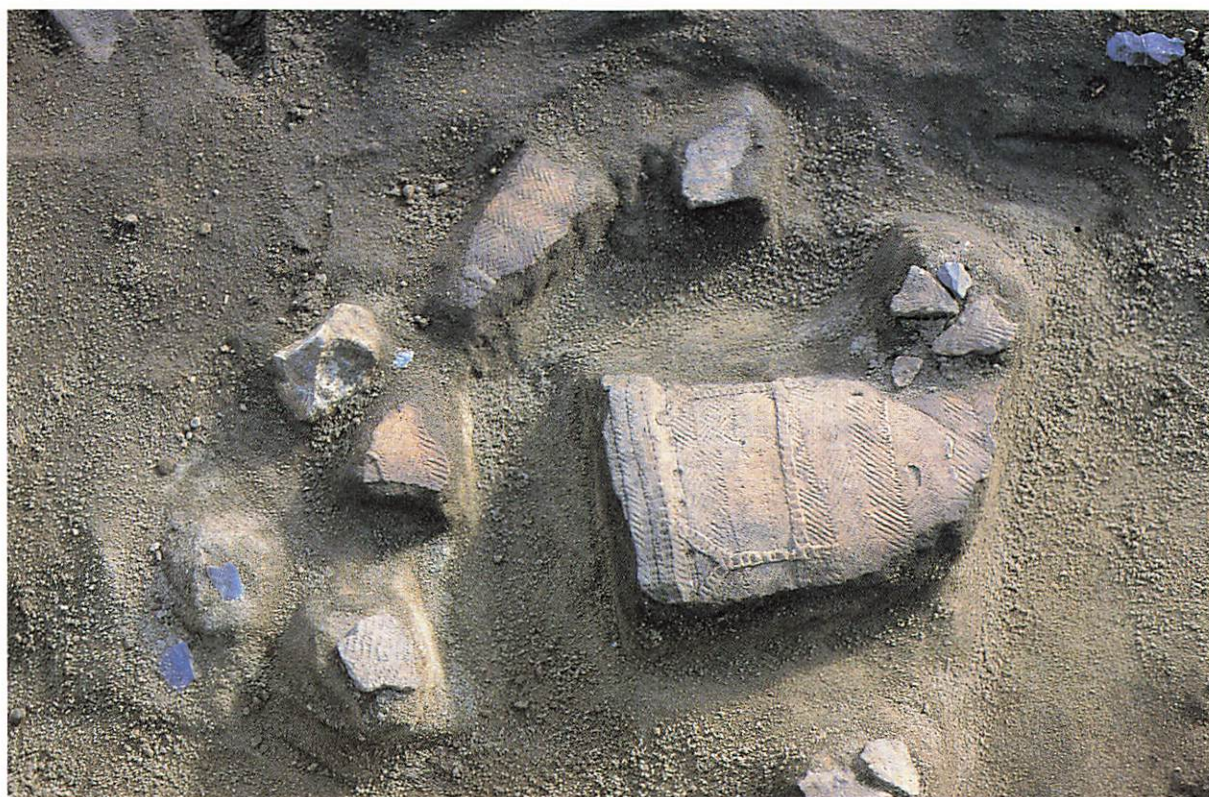
大浜中登線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998.3

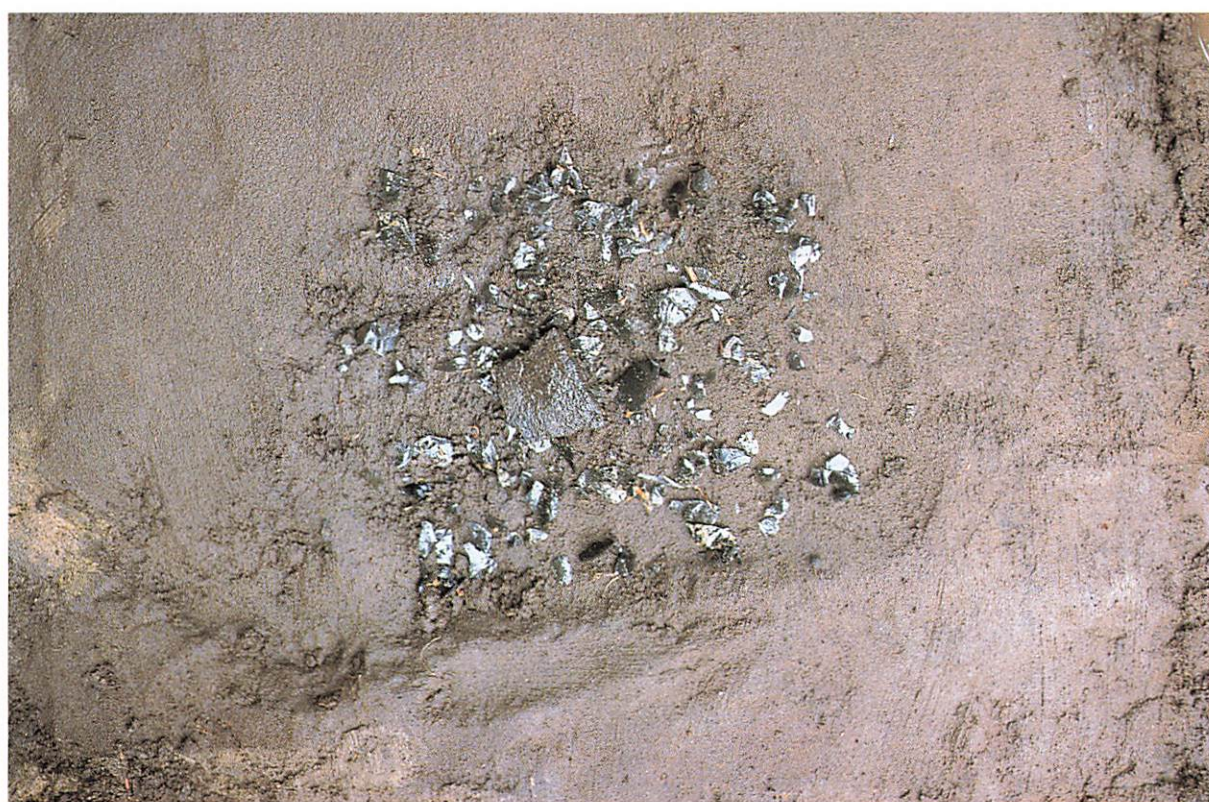
北海道余市町教育委員会



空から見た登川右岸遺跡



土器の出土状況



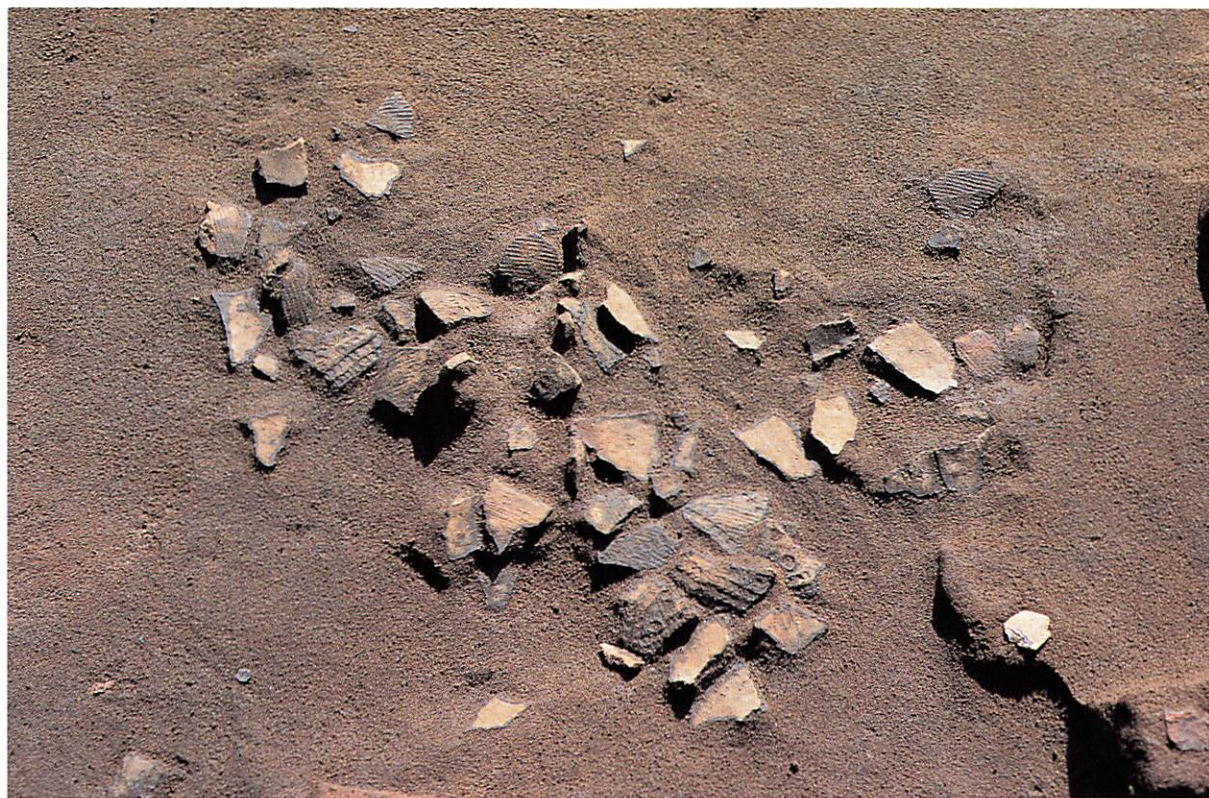
フレイク集中跡 (S1)



フレイク集中跡 (S6)



フレイク集中跡 (S13)



住居跡 遺物出土状況



住居跡

目 次

序 余市町教育委員会 教育長 笹山義孝	i
例 言	ii
第Ⅰ章 調査に至る経過と調査方法	1
第Ⅱ章 遺跡の地形と地質	4
第Ⅲ章 周辺の遺跡	6
第Ⅳ章 遺跡の調査	7
第Ⅴ章 総括	28

— 挿 図 目 次 —

第1図 遺跡周辺図	iii	第15図 フレイク接合図	19
第2図 遺跡位置図	2	第16図 包含層出土の遺物	22
第3図 古地区に見る地形	3	第17図 包含層出土の遺物	23
第4図 遺跡周辺の地形図	4	第18図 包含層出土の遺物	24
第5図 砂丘断面図	5	第19図 包含層出土の遺物	25
第6図 遺跡遺構図と調査工程図	8	第20図 包含層出土の遺物	26
第7図 南北土層断面図	9	第21図 包含層出土の遺物	27
第8図 南北土層断面図	10	第22図 登町2遺跡の土器	29
第9図 竪穴上面図	13	第23図 フゴッペ貝塚出土の土器	30
第10図 竪穴住居跡平面図	14	第24図 登町2遺跡の石器	31
第11図 土壌平面断面図と出土土器	15		
第12図 フレイク集中跡状況	16		
第13図 竪穴床面出土の遺物	17		
第14図 竪穴床面遺物とフレイク接合	18		

— 表 目 次 —

第1表 黒曜石フレイク集中跡（スポット）一覧	32
第2表 石器実測図一覧	33

— 図 版 目 次 —

第1図版 遺跡の全景	35	第6図版 フレイク出土状況	40
第2図版 発掘風景	36	第7図版 出土遺物(第1～2類土器)	41
第3図版 土層断面図と湿地出土の樹木	37	第8図版 出土遺物(第3～5類土器)	42
第4図版 竪穴住居跡と遺物出土状況	38	第9図版 出土遺物(石器類)	43
第5図版 土壌と遺物出土状況	39	第10図版 出土遺物と参考資料	45

序 文

余市町は北海道の南西、積丹半島の基部に位置し、北は日本海に面し、三方をゆるやかな丘陵に囲まれた、人口約24,000人の町です。

余市町は、比較的気候が温暖なことで知られ、また海の幸、山の幸にも恵まれていることから、北海道内では早くから人が定住し、生活を営んでいました。この歴史を物語るように文化財も豊富に所在し、国指定史跡フゴッペ洞窟、国指定重要文化財・史跡旧下ヨイチ運上家、国指定史跡旧余市福原漁場の3件の国指定文化財を始め、北海道指定文化財2件、余市町指定文化財33件にのぼっています。さらに埋蔵文化財についても、60箇所を超える周知の包蔵地が所在し、多くの遺物が発掘されています。

今回の調査は、町道大浜中登線道路改良工事に伴う緊急発掘調査として実施されました。当該地は、二級河川登川の河口に近い右岸に位置し、近傍には大谷地貝塚遺跡、大浜中遺跡などがあり昭和26年に行われた登川切替工事の際には、大浜中遺跡から据文金物など中世の武具装身具が発見されて大きな話題となった経緯があります。

今回の発掘対象地域である「登川右岸遺跡」は、本町栄町砂丘の西端に位置する縄文時代中期に属する遺跡で、3ヵ月に及ぶ発掘調査で土器・石器などの遺物約24,739点、遺構22件等が発見されています。これらの資料は、今後余市民俗資料館等において随時展示を行い、広く地域の方々に紹介し、もって文化財保護活動の一助といたしたいと思えます。

今回の調査にあたりましては北海道教育委員会を始めとする関係各位から種々のご指導をいただきました。また、発掘作業にあられた皆様のご努力、さらには発掘調査に深い関心を寄せられました地域の皆様のご支援等多くの方々のご協力により、成果をあげることができました。ここに衷心より感謝を申し上げ、登川右岸遺跡調査報告書刊行にあたっての序文といたします。

平成10年3月

北海道余市町教育委員会

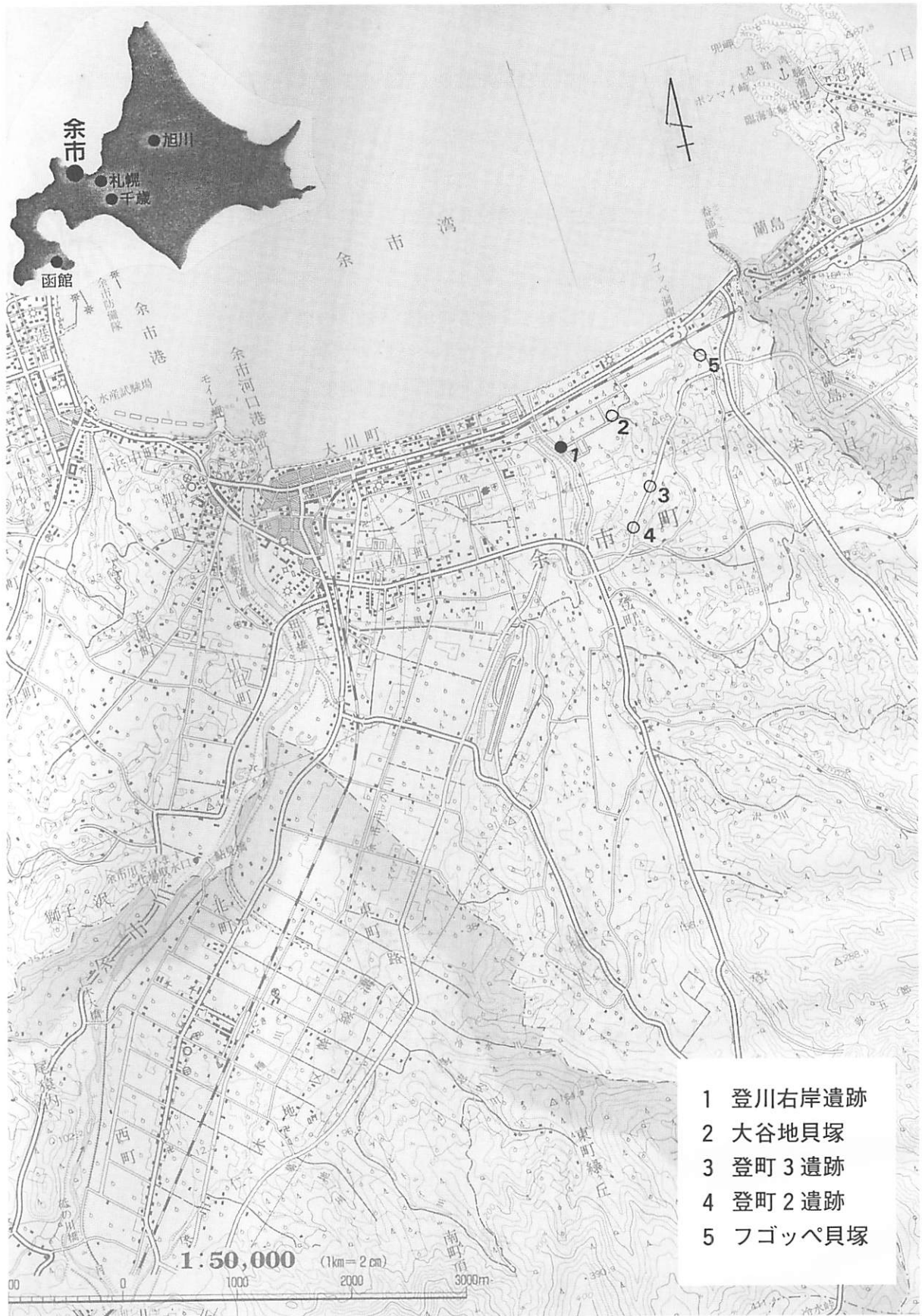
教育長 笹山 義孝

例 言

- 1、本書は、平成9年度大浜中登線道路改良工事に係る登川右岸遺跡の緊急発掘調査の報告である。
- 2、本遺跡は北海道余市郡余市町登町1-1番地先にある。遺跡の登載番号はD・19・56
- 3、発掘調査は、余市町建設水道部建設課の委託を受けて、余市町教育委員会が主体となって実施した。
- 4、本書の執筆、編集は乾芳宏が行った。
- 5、樹木分析、同定には三野紀雄（北海道開拓記念館）の協力を得た。
- 6、遺構の写真撮影は今和明、遺物の写真撮影は乾芳宏が行った。
- 7、各種遺物の実測は、阿部栄子、北川千登世、渡部優喜子が行った。
- 8、調査及び整理体制
発掘期間 平成9年8月1日～10月31日
整理期間 平成9年11月1日～平成10年3月25日
調査主体者 笹山義孝（余市町教育委員会教育長）
調査担当者 乾 芳宏（余市町教育委員会文化財係主査）
事務補助員 小原知子
発掘作業員 石川陽介、今和明、菅原勇悦、谷村邦彦、寺岡重幸、阿部栄子、北川千登世、渡部優喜子
整理作業員 阿部栄子、北川千登世、渡部優喜子
- 9、発掘調査及び整理作業には下記の方々の指導、助言および協力を得た。記して感謝の意を表す幸いです。
北海道教育委員会 木村尚俊、大沼忠春、種市幸生、田才雅彦、西脇対名夫
常呂町教育委員会 武田修、仲鉢浩

凡 例

- 1、本書は、遺構・遺物の略号及び記号を次のように用いている。
(1) 遺構 住居跡 H (H o u s e) 墓塚 P (P i t)
フレイク集中跡 S (S p o t) 炉跡 F (F i r e)
(2) 遺物 土器 ● 石器・フレイク ▲
- 2、本書は図を基本的に次のように表記してある。
遺構関係 1 / 4 0
遺物関係 土器 1 / 4 拓本 1 / 3 剥片・石器 1 / 2
礫石器 1 / 2
必要に応じてスケールを入れて示した。
- 3、第1図は国土地理院発行の5万分の1地形図を使用した。



- 1 登川右岸遺跡
- 2 大谷地貝塚
- 3 登町3遺跡
- 4 登町2遺跡
- 5 フゴッペ貝塚

第1図 遺跡周辺図

第 I 章 調査に至る経過と調査方法

1、調査に至る経過

大浜中登線は、小樽方面から余市市街地を迂回して仁木、赤井川方面へ至る迂回路であり、近年は国道5号を避けるマイカー等が著しく増加する傾向にある。また地域住民の生活、通学路でもあるが、幅員が狭く一部S字型に蛇行しており危険な状態でもあるため、これらを解消するために早急な改良工事が必要とされていた。しかし、周辺には登川右岸遺跡をはじめ近隣には大谷地貝塚などが分布していることから平成8年10月21日、余市町から大浜中登線道路改良工事についての事前協議が提出され、平成8年11月15日、北海道教育委員会文化課調査班西脇主任によりB調査が実施された。

その結果、遺構らしきものと剥片が発見されたことから工事区間の一部は発掘調査が必要ではないかとの講評を受け、平成8年12月20日付で正式に北海道教育委員会から事前に発掘調査を行い記録保存することが必要であると回答を得た。

その後、町理事者と協議を進めたが改良工事計画の変更は困難なことから調査対象面積980㎡については止むなく発掘調査を行い記録保存することとした。発掘調査は余市町教育委員会が主体となり平成9年8月1日から10月31日まで実施した。

2、調査方法

調査区域は、仁木、赤井川方面へ至る迂回路であり、マイカーが著しく多く、また観光シーズンにはくだもの狩りの大型バスが通るため、交通止めは困難であるため、対象面積980㎡をほぼ2分して片側交互通行の中で、さらに砂丘上にあることから砂崩れにより危険性が高いことから矢板を打ち込んでの調査となった。

また調査内に水道管が埋設、発掘終了とともに道路への現状復帰をよぎなくされたため、町建設水道部建設課及び水道課の工事監督員と常に密接な打合せをしながら調査を実施した。

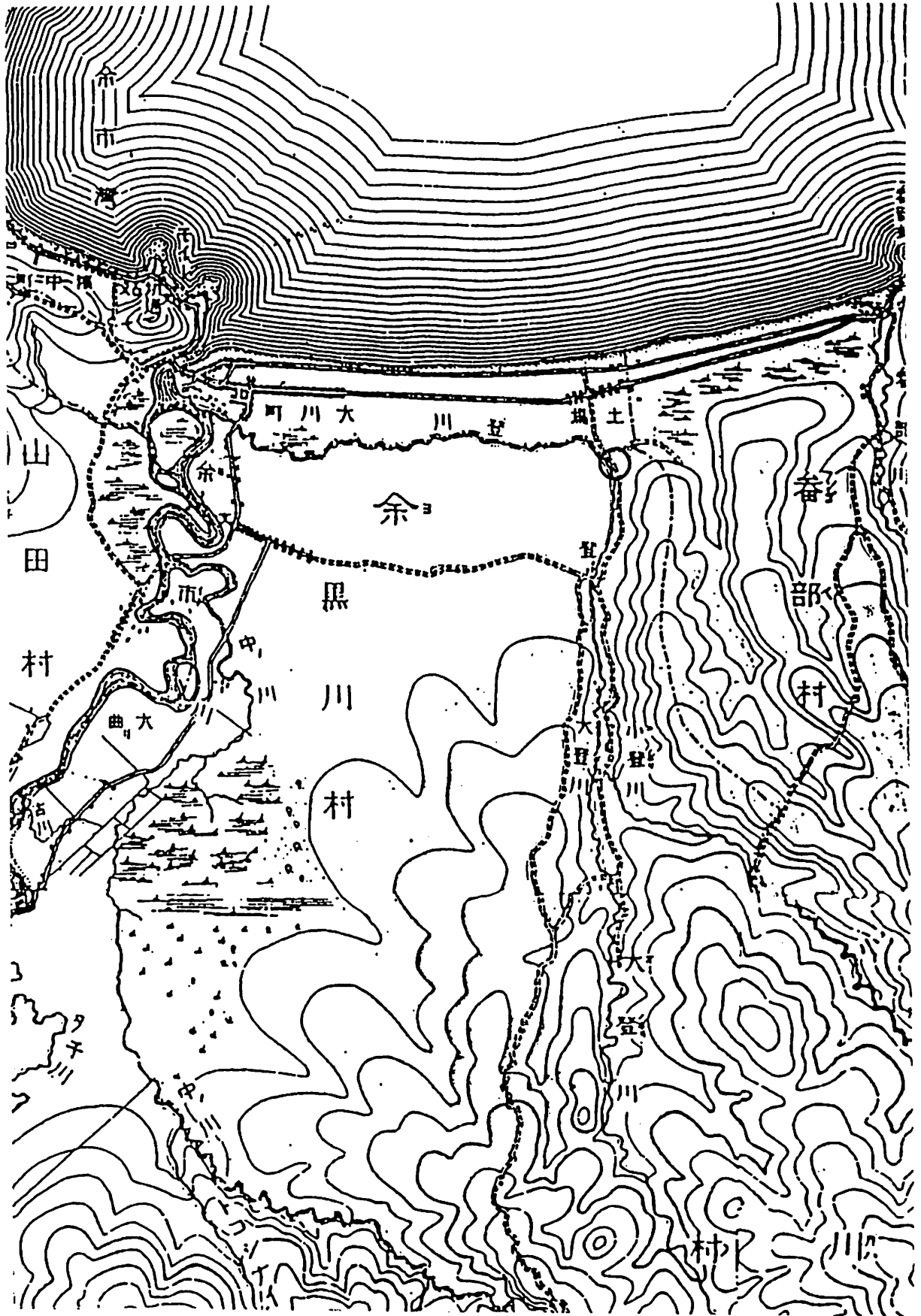
現道はアスファルト、砂利及び盛土部分を重機で除去した後に発掘調査をしたが、調査内には排土場がないため、ダンプにより借地へ運搬するという方法をとった。

基本的には5mグリットであるが、道路工程などから順次、南北への発掘は無理なことからA～Gのような発掘工程となった。5mグリットの基準は矢板として南北にそれぞれグリットを設定した。

遺物については、平板測量において全て点で図化し、主要遺物については番号をつけて取り上げることとした。当初は2ヶ月で調査を完了の予定であったが、8月の大雨、矢板打ち替え、遺物の多量出土により3ヶ月となった。

3、整理作業

発掘調査中及び、発掘調査終了後も水洗、注記を継続した。本遺跡では石器破片が多量に見られるスポットが出土したため、剥片(フレイク)の接合作業に多くの時間を費やした。土器については小片が大半であるが、主要な文様と思えるものは拓本、実測図を掲載した。



第3図 古地図に見る地形 (明治29年、陸地測量図)

第Ⅱ章 遺跡の地形と地質

登川は二級河川であり、現在は余市湾に注いでいるが昭和26年に行われた登川切替工事によるものである。

それ以前は登川右岸遺跡の下流約100mほどで西方に屈曲し、大川へとつながっていたものであり、湿地が広がっていたようである。

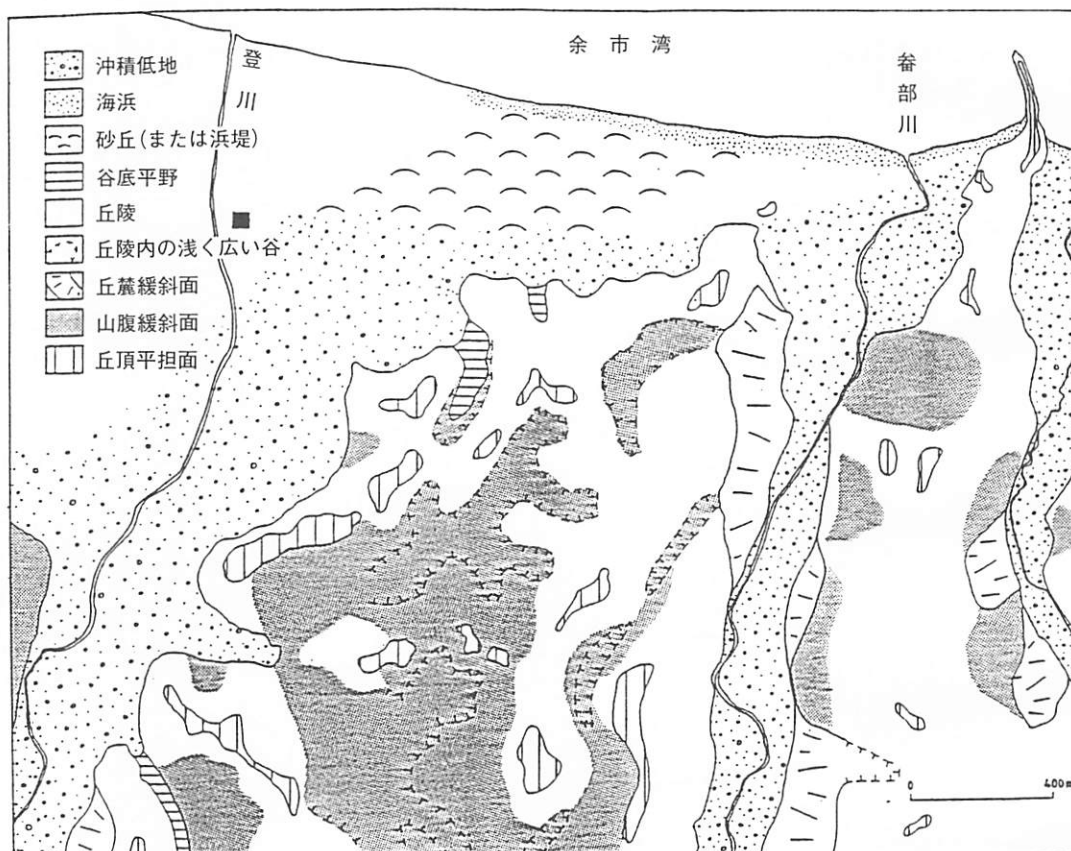
遺跡周辺は、砂丘（または浜堤）、沖積低地、丘陵から成っている。

砂丘は、現汀線に平行な高まりとなり、二つの砂丘列が知られている。海岸近くのものは大川砂丘、その南方は黒川砂丘と呼ばれているもので登川右岸遺跡は後者に立地している。

沖積低地は登川と畚部川に発達しており丘陵緩斜面との境界は不明瞭のことが多い。

丘陵は固結度の低い凝灰質砂岩と安山岩質火山角礫岩から成り、それぞれ小樽累層の下部凝灰質砂岩層と上部集塊岩層に対比される。

丘陵の頂部は割合に平坦であり、沖積地にかけて緩斜面となっている。この丘陵地では赤褐色の風化層が現地表下に発達することが多く、遺跡の背後にある丘陵地でも赤褐色の風化層が見られる。



第4図 遺跡周辺の地形図 (参考文献3に一部加筆)

遺跡の層序

遺跡の層序は上述した黒川砂丘上にあるもので、砂層と低地を覆う粘土層において層位を確認しつつ掘り下げた。遺跡の調査で説明するように分断された区域調査のためA区を基本層序として便宜的に以下のとおり6層とした。

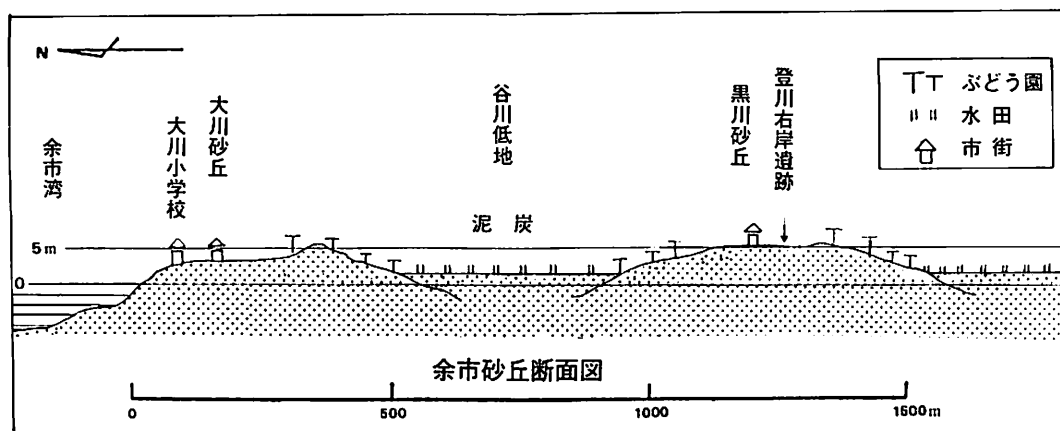
I層 盛土	I a 黄褐色土
	I b 暗褐色土
	I c 砂利層
	I d 黄色粘土層
II層 粘土層	II a 灰色粘土 (やや粘性を有する)
	II b 黄褐色土 (粘性を有する)
	II c 灰色粘土 (粘性が強い)
III層 灰色砂層	
IV層 暗褐色砂層	IV a 暗褐色砂層 (やや粘性を有する)
	IV b 暗褐色砂層
V層 茶褐色砂層	V a 茶褐色砂層
	V b 茶褐色砂層 (縞状を呈する)
VI層 青色粘土層	

この層序を見るとIVb層下面からV層上面(約20cm)にかけて遺物包含層があり、砂丘上面と低地面とでは約1.5mほどの比高差がある。

北方については低湿地帯であったと思われる、青色粘土層が広く堆積し、樹木が埋没しており、南方については低地でありながら砂層が基盤となっていたようである。しかしII層が厚く堆積しており、河川流域と関連した氾濫時のものと考えている。恐らく季節的な現象で徐々に堆積したとするには、全く遺物が包含されていないことから短期間的なものと思われる。VI層からは自然木イヌエンジュ属 (*Maackia* sp) が出土している。

参考文献

- 1) 猪木幸雄 垣見俊弘 1954 『5万分の1地質図幅』
- 2) 久保武夫 1966 『余市海岸の砂丘』 『余市高校研究紀要』
- 3) 花岡正光 1989 『地形、地質』 『登町2遺跡・登町3遺跡』



第5図 砂丘断面図 (参考文献2に加筆)

第三章 周辺の遺跡

余市町内には現在59ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。立地として海岸に発達する砂丘上には縄文時代中期～近世、丘陵上には縄文時代早期～後期の遺跡が分布する傾向がある(第1図)。

登川右岸遺跡は市街地から東方に約3kmにある登川河口から約600m上流の右岸に位置し、黒川砂丘上に立地している。この遺跡は平成8年の範囲確認調査で発見されており、この遺跡の東方約600mのところに余市式土器の標準遺跡として知られる大谷地貝塚がある。

大谷地貝塚は大正時代から発掘調査されており、五十嵐鐵の著した『大谷地貝塚之層位的研究』として公表されている。それによると貝層が砂層を挟んで2面確認されており大量の遺物が出土している。時代としては縄文時代中期～続縄文時代である。

登川右岸遺跡の背後には標高20～30mの丘陵が広がっており、登川2・3遺跡が北海道埋蔵文化財センターにより平成元年に発掘調査されている。

登川2遺跡は縄文時代中期の円筒土器上層式、見晴町式、天神山式、柏木川式、同後期トリサキ式、手稲式等が出土している。

登川3遺跡は縄文時代早期の東釧路ル式、同中期の天神山式、柏木川式、同後期の涌元式、大津式、同晩期の大洞系土器等が出土している。

登川右岸遺跡の東方約1km、フゴッペ川左岸の丘陵斜面から沖積低地にかけてフゴッペ貝塚があり、北海道埋蔵文化財センターにより平成元年に発掘調査がされている。

フゴッペ貝塚は大谷地貝塚と同様に大正時代から知られており、同じ貝塚内に立地と時期の異なる貝塚を区別する意味で松下地点、埋文センター地点がある。

埋文センター地点からは縄文時代前期の円筒土器下層式を主体として続縄文、擦文時代にかけて遺物が出土している。

遺構として住居跡39軒、土塋150基、貝塚ブロック、焼土24ヶ所が発見されており、縄文時代前期～中期末の様相を知る上で重要である。

周辺としては北海道指定文化財としての西崎山ストーンサークルがある。標高約70mの細長い丘陵上に4ヶ所ほどの配石群が発見されており、小樽市忍路、地鎮山ストーンサークルとともに群をなしていると思われる。

また国指定史跡フゴッペ洞窟もある。この洞窟内に200以上を数える刻画があり、全国的に類例がなく北方との関係が指摘されており、毎年多くの来館者が訪れている。しかし最近洞窟内の風化が激しく、刻画に影響を及ぼすことが考えられるため、フゴッペ洞窟保存調査委員会を発足して保護の方法について検討中である。

参考文献

- | | | |
|--------------|------|---------------|
| 五十嵐 鐵 | 1933 | 『大谷地貝塚之層位的研究』 |
| 北海道埋蔵文化財センター | 1989 | 『登町2遺跡・登町3遺跡』 |
| 北海道埋蔵文化財センター | 1989 | 『フゴッペ貝塚』 |
| 駒井和愛 | 1958 | 『音江』 |
| フゴッペ洞窟調査団 | 1970 | 『フゴッペ洞窟』 |

第Ⅳ章 遺跡の調査

発見された遺構と遺物について説明をする。

遺構は住居跡1軒、土塋1基、フレイク集中跡(スポット)が20ヶ所発見されている。住居跡は縄文時代中期後半の北筒式(トコロ6類併行)の時期のもので楕円形を呈し、柱穴が2ヶ所確認された。砂丘土を掘り込んでいるため壁は崩れ、わずか数cmしかなかった。

土塋については発掘区に半分のみであり、全体を知ることが出来ないが、楕円形を呈すると思われる。覆土から数片の土器片があり、北筒式の時期と思われる。

フレイク集中跡(スポット)は直径1m程度の範囲に黒曜石のフレイク及びチップが集中しているもので数点であるが接合できることから石器製作址と思われる。

黒曜石は斑点状の不純物が縞状に見られ、角張っているものが大半であるため、赤井川産のものと推定されるが、稀に赤色文をもつものも含まれている。

遺跡出土の土器は全て北筒式(トコロ6類)に併行する型式であり単純遺跡と言え、この遺跡の性格として石器製作に関する場であったと思われる。

立地的に見ると砂丘上とその低地に生活場があり、地表からは1~2mの高低差がある。砂丘は黒川砂丘と呼ばれているもので海岸線に沿って平行に形成されており、この地では高台と言えるものである。低地は登川と比高1m程しかないもので湿気をおびる砂地となっている。

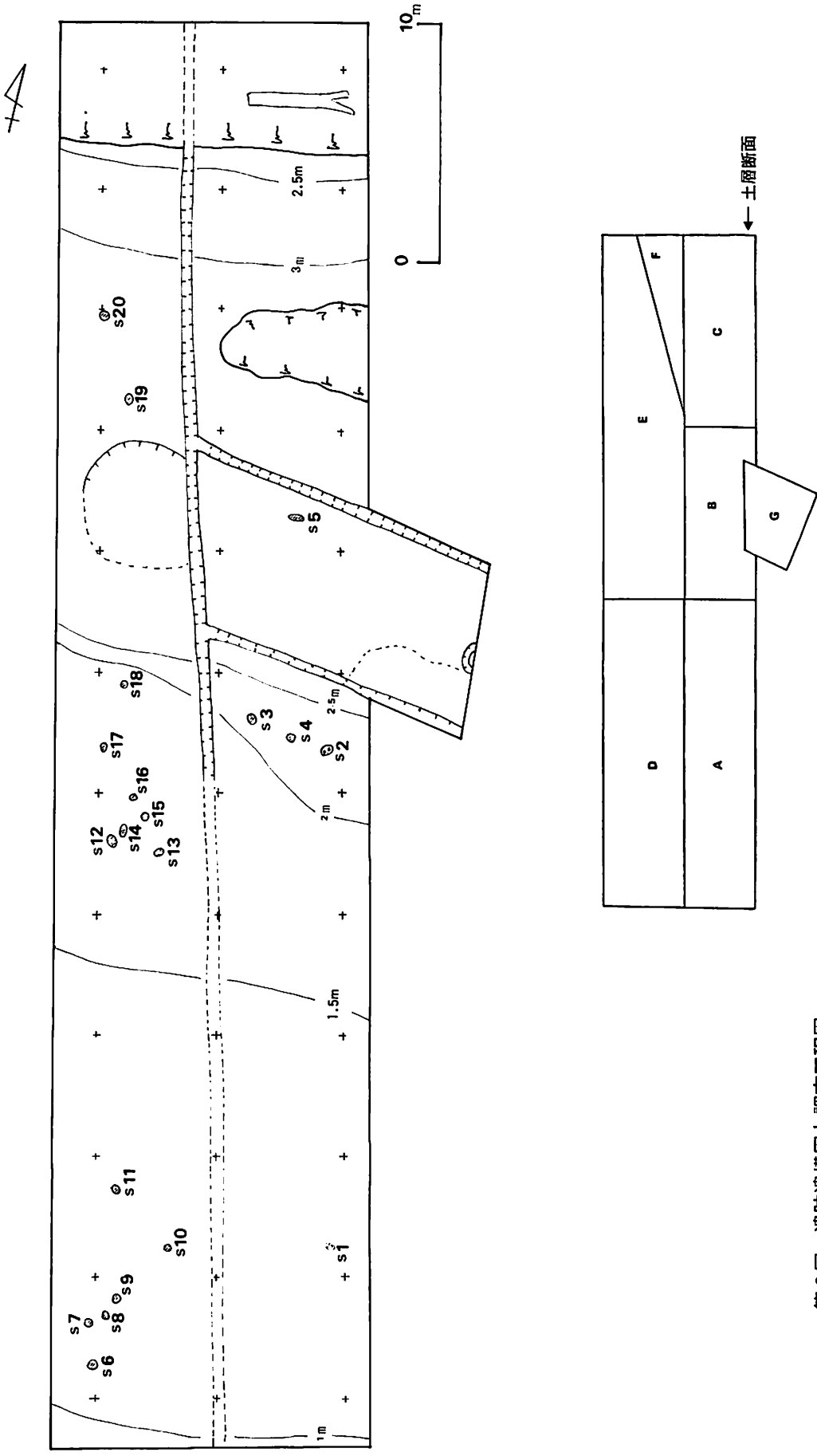
層位的には砂丘上以外は灰色粘土層が低地を厚く覆っている。これらの状況から低地は河川の氾濫地と思われ、一気に埋まってしまった可能性がある。それは粘土層間に間層がなく遺物の出土もないからである。そのように考えると低地での生活ができなくなり砂丘上に移動を余儀なくさせられてしまったことも想定できようか。

いずれにせよ、当町においてこのようにフレイクのスポットが多く発見された例はなく、石器の製作、搬入について一助を与えてくれたものと言えよう。

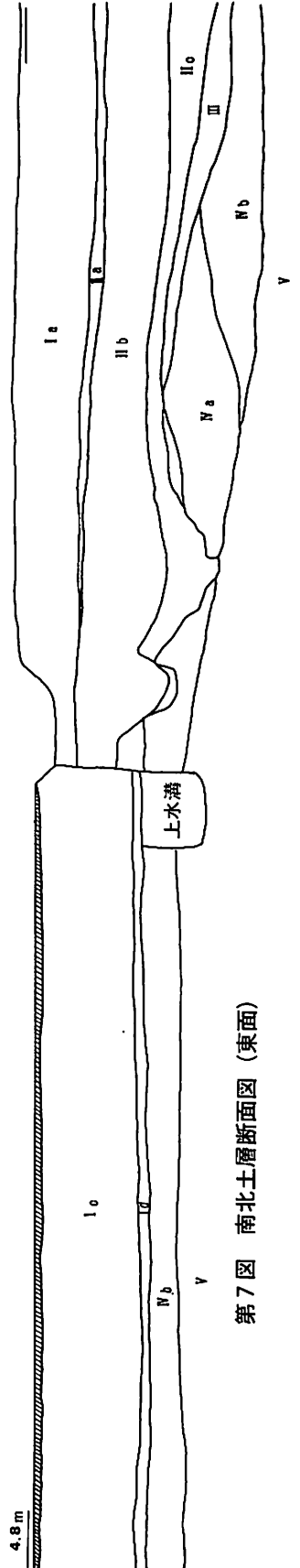
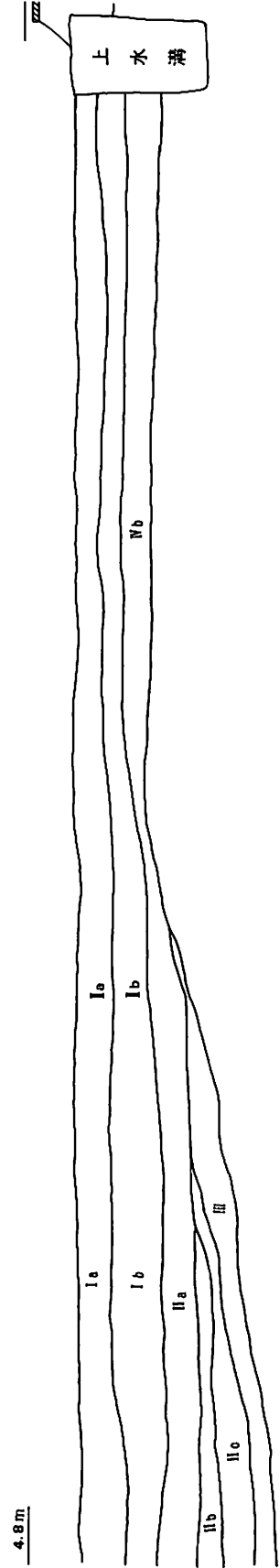
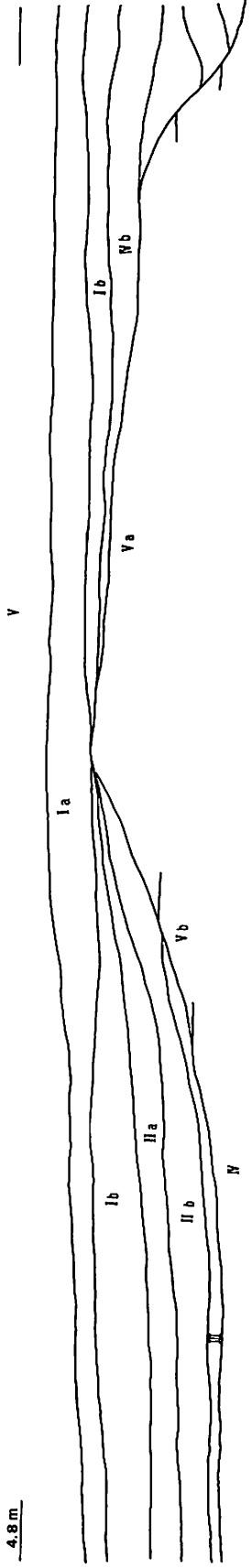
この遺跡においての出土総点数は24,739点であり、土器4,667点、石器・フレイク数19,998点、その他(陶磁器破片等)74点となっており、陶磁器は表土のものでプラスチック製品等と混在することから最近のものと言える。

登川遺跡の遺構及び遺物出土一覧

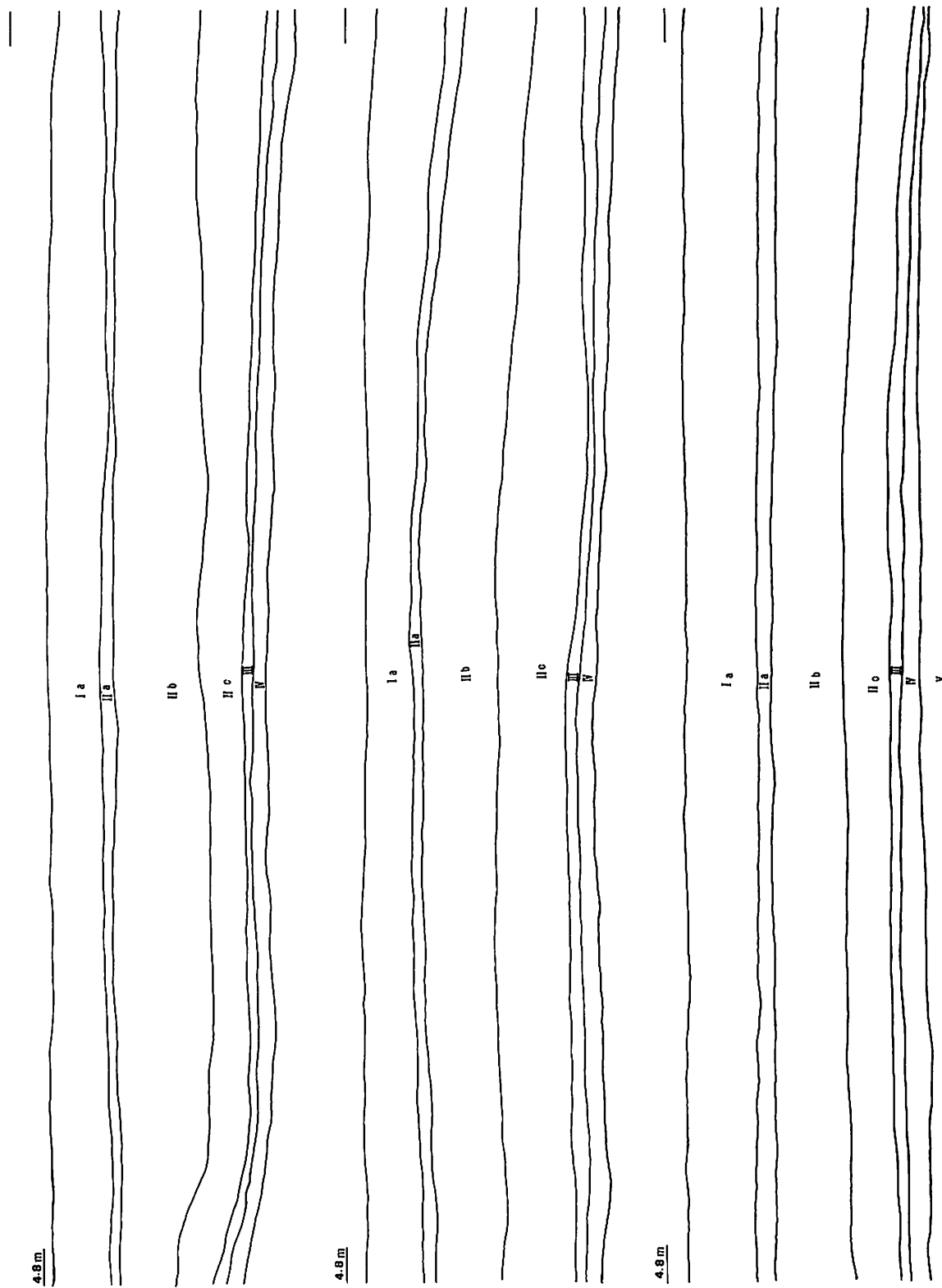
遺構	住居跡	1軒		
	土塋	1基		
	フレイクの集中跡(スポット)	20ヶ所		
遺物	総数	24,739点(表土層出土	1,948点、包含層及び遺構	22,791点)
	土器片	4,667点		
	石器	17点		
	フレイク	19,808点		
	礫	173点		
	その他(表土直下の陶磁器破片)	74点		



第6図 遺跡遺構図と調査工程図



第7图 南北土层断面图 (东面)



第 8 图 南北土层断面图 (東面)

遺構と遺物

遺 構

竪穴住居跡（第9～10図）

東側部分は水道管の埋設溝によって破壊されている。また南側についてはゆるやかな斜面となっており確認はできなかった。

長径 5.5m を計る楕円形を呈し、南側に2柱穴を発見した。砂丘上を掘り込んでいるため崩れがあり壁面の立上がりは湾曲となっている。床面は若干固くしまり、黒褐色砂が堆積しており、北西部分には台石と思われる砂岩が見受けられた。南側に直径20cm、深さ15cmほどの柱穴が2ヶ所発見されたが、北側については定かではなかった。

竪穴床面から出土した遺物について説明する（第13・14図）。

土器においては口縁部断面がやや肥厚し、三角形を呈するものが多く、口縁部に押し引きを1～2条配し、肥厚帯直下に刺突文（場合によっては突瘤文となる）が施すものが多い。刺突文は器面に対して垂直に当てており、工具として管状、棒状のものがある。

胴部破片では単なる斜行縄文のもの、結節回転の見られるもの、撚りの異なる縄文にある羽状縄文、貼付に押し引きが見られるものなど多様である。

底部は若干の張り出しをもつもの、ゆるやかなものがある。

胎土には若干の小石粒子が含むが、器厚は1cm前後で、色調は茶褐色、内面は丁寧な整形が行われている。

№22・23、第17図№30は、竪穴上部から出土している。

石器については剥片石器として№1がある。両面加工によるものでスクレイパーと言えるものである。礫石器として№9があり敲石と思われる砂岩の偏平礫である。

その他は全て石核または剥片と言えるものである。石核としては黒曜石の自然面を残している場合が多く、角張っている特徴がある。№6～8の石核を見ると角礫の平坦部を打撃点として縦長剥片をとり、その後打点を変えて平坦面から打ち欠いていることが理解できる。

土壙（第11図）

発掘区の東側で半分のみ調査である。ゆるやかな掘り込みで、長径 1.2m、深さ40cmを計る。覆土中から土器片が数点まとまって出土しており、いずれも縄文時代中期の北筒式土器である。土壙の性格は定かではない。

土壙の周辺には若干のまとまった遺物があり、南側に若干の暗褐色を有した凹みが見られた。単に低湿地へのゆるやかな傾斜かもしれない。

剥片集中区（フレイクスポット）

この遺跡における出土遺物の特徴として多量の黒曜石剥片（フレイク）が出土したことにあつた。ここで25点以上のフレイクがまとまっている場合をスポットと把握して説明をするが出土状況は第1表のとおり20ヶ所である。数量と重量によってフレイクの大きさはある程度推測できると思われる。

出土の状況では同一レベルに散在する場合、10cm以上の厚さがある場合もあることから

平地をそのまま利用したものと若干の凹みを作ってから廃棄したものの2通りが考えられる。

黒曜石は白色の小不純物を含んでいることが多いことから赤井川産の黒曜石が大半と思われる。石器となっているものは透明度を持つものが多いことから原石の選定、フレイクの剥離には十分注意されたことと思われる。

スポット別に概観すると原石の類似性からS1では4個以上、S5では4個以上、S12では3個以上を持ち込んでフレイクを剥いでいるようである。

フレイクはS2において7個、S12において8個が接合できた。S2のNa10では表皮を剥いだ後に逆方向から、Na11では上下面から打撃しており、幅広のフレイクをとりながら調整している。S12では表皮が見られるフレイクが多いことから、原石の全体を打ち欠いた後に押圧剥離法によって刃部を作出しようとしていると思われる。

これらのスポットのフレイクについてより一層の接合作業を進めなければならないが、S1・S12で接合ができたことは少なくとも原石を持ち込んで石器製作をしていた可能性があり、S1～S20は全体的にそういうことが言えるであろう。

スポットはもとより、この遺跡は全体的にフレイクが散布しておりスポットとの関連性も無視できない。

スポットの分布状況として南方に多いことから、登川の川辺で石器製作をしていた状況がわかる。しかし層的に見るとⅡ層の粘土層が厚く堆積していることから河川の氾濫等によってその場を放棄している可能性がある。粘土層には間層もなく遺物の出土が無いことから裏付けられよう。

砂丘上にもスポットがあることから、上述の過程からすると低部よりも新しいか同時期と言えるであろう。

小結

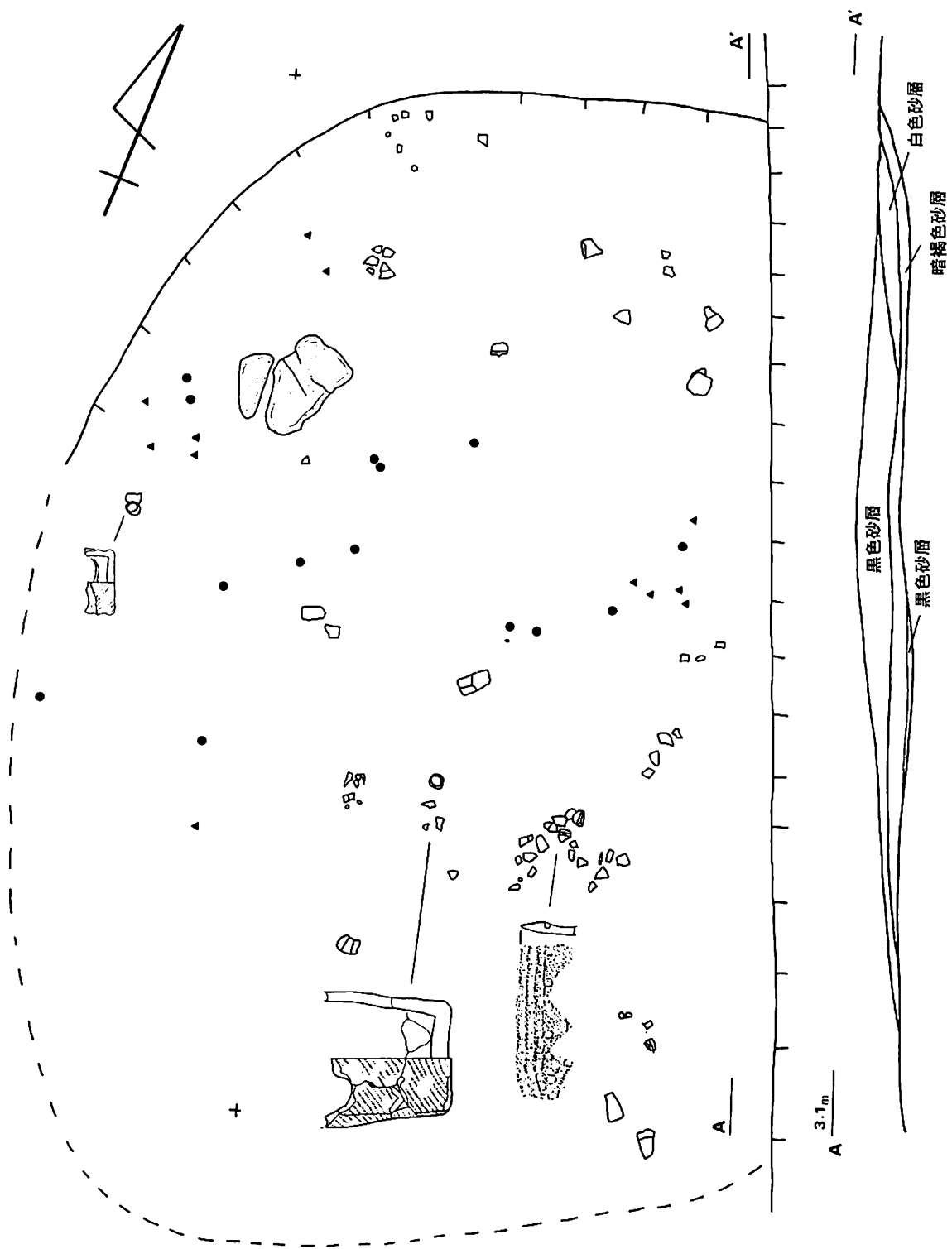
この遺構を地形との関連で考えた場合、低湿地と砂丘地と分けられ、低湿地は河川の氾濫も時々あり得ることから、石器製作等の作業場、砂丘上は生活の場と区別していたようである。

現在の登川と発掘区最下層とは1m程の比高差しかないことから生活の場は安定した地を選んだと言える。

竪穴住居及び土壙は北筒式（トコロ6類併行）が出土しており縄文時代中期後半と言える。

スポットについての時期であるが土器と共伴しないことからそのもので時期決定は困難であるが、包含層から出土している土器が北筒式であることからこの遺跡全体を単純遺跡として把握したい。

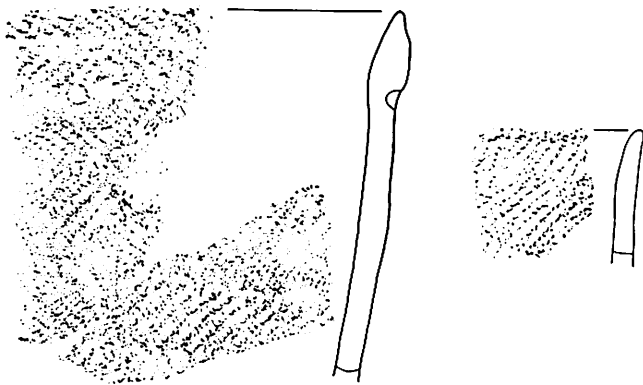
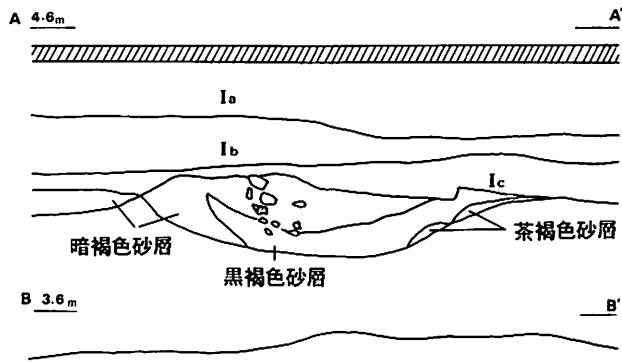
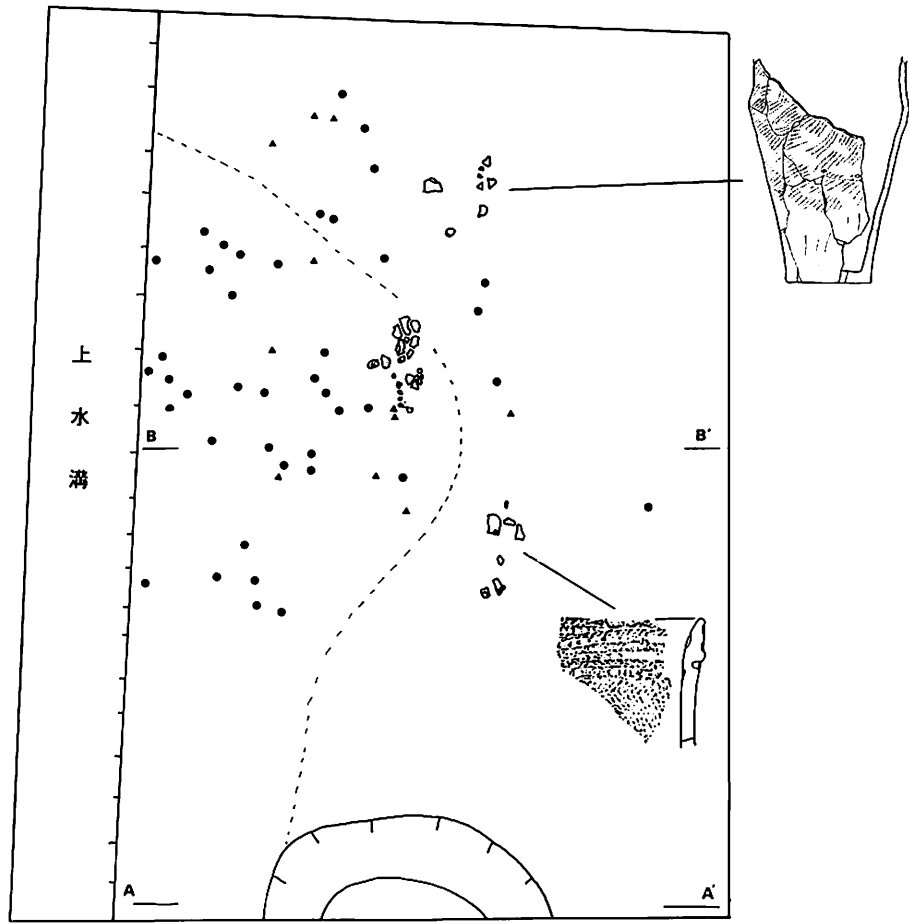
黒曜石の原石は赤井川産が大半と推定でき、スポットとそれ以外のフレイクを合わせると大量の原石を持ち込んでおり、原産地域と密接な交流をしていたことが想定される。



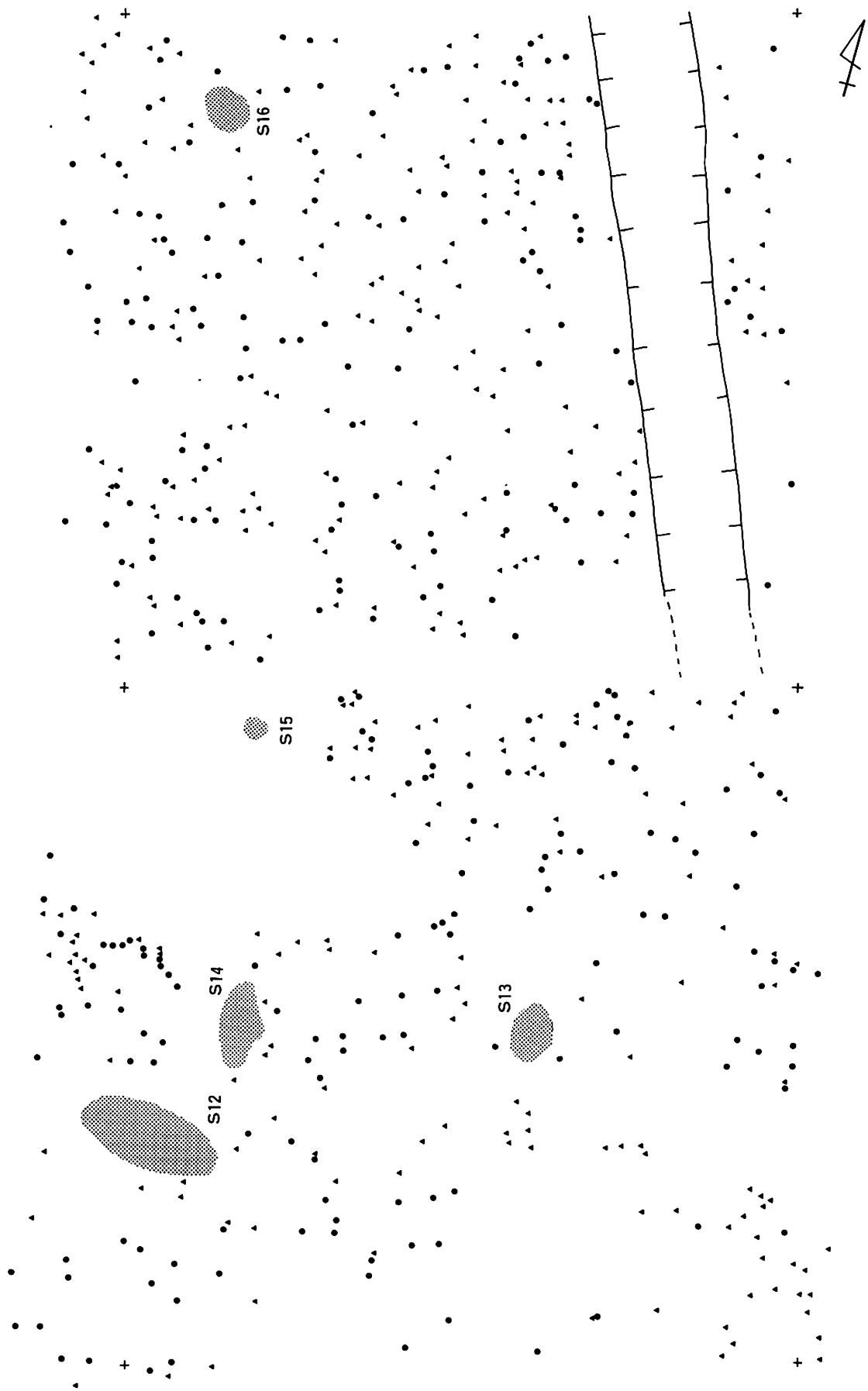
第9圖 豎穴上面圖



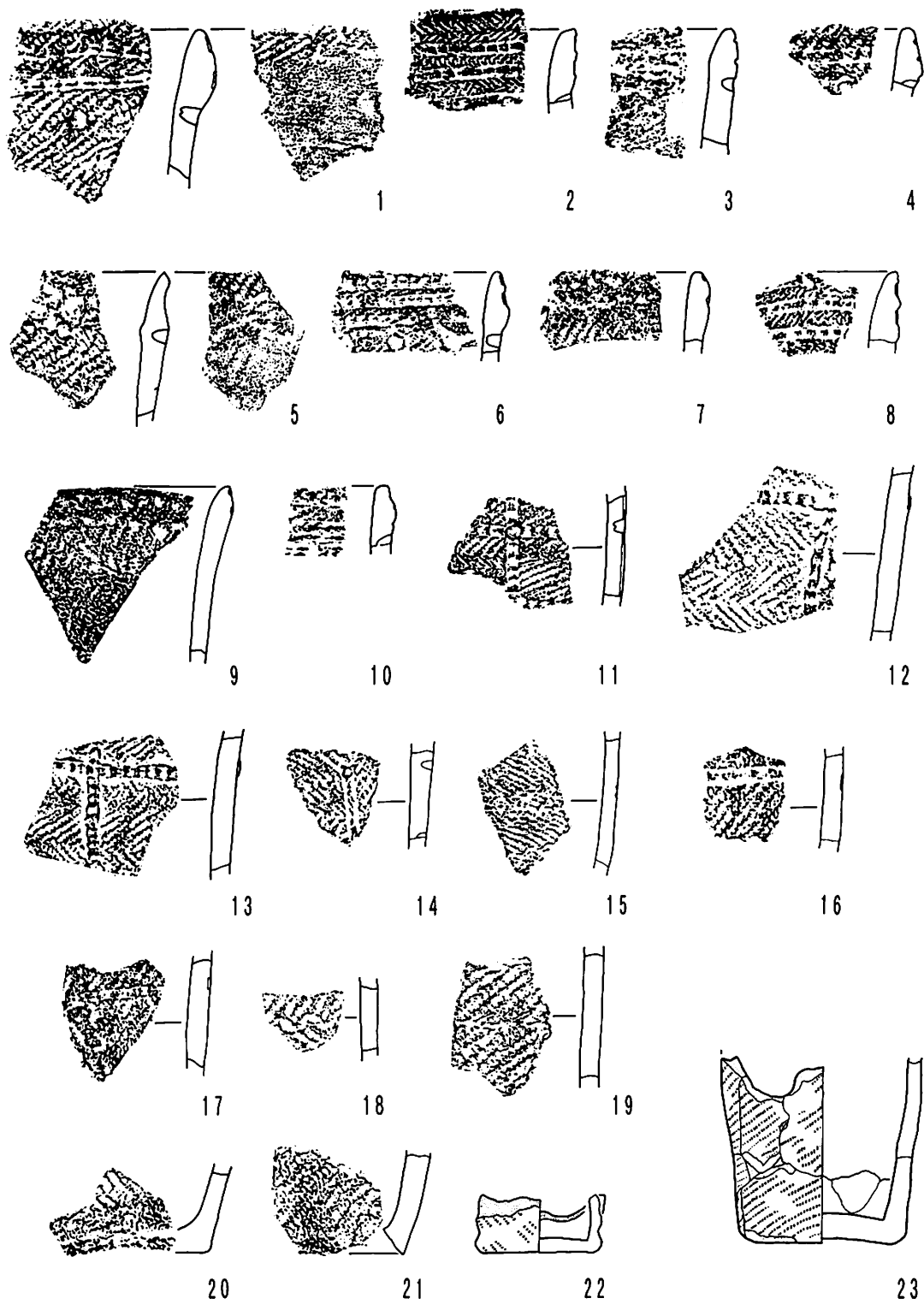
第10图 豎穴住居跡平面図



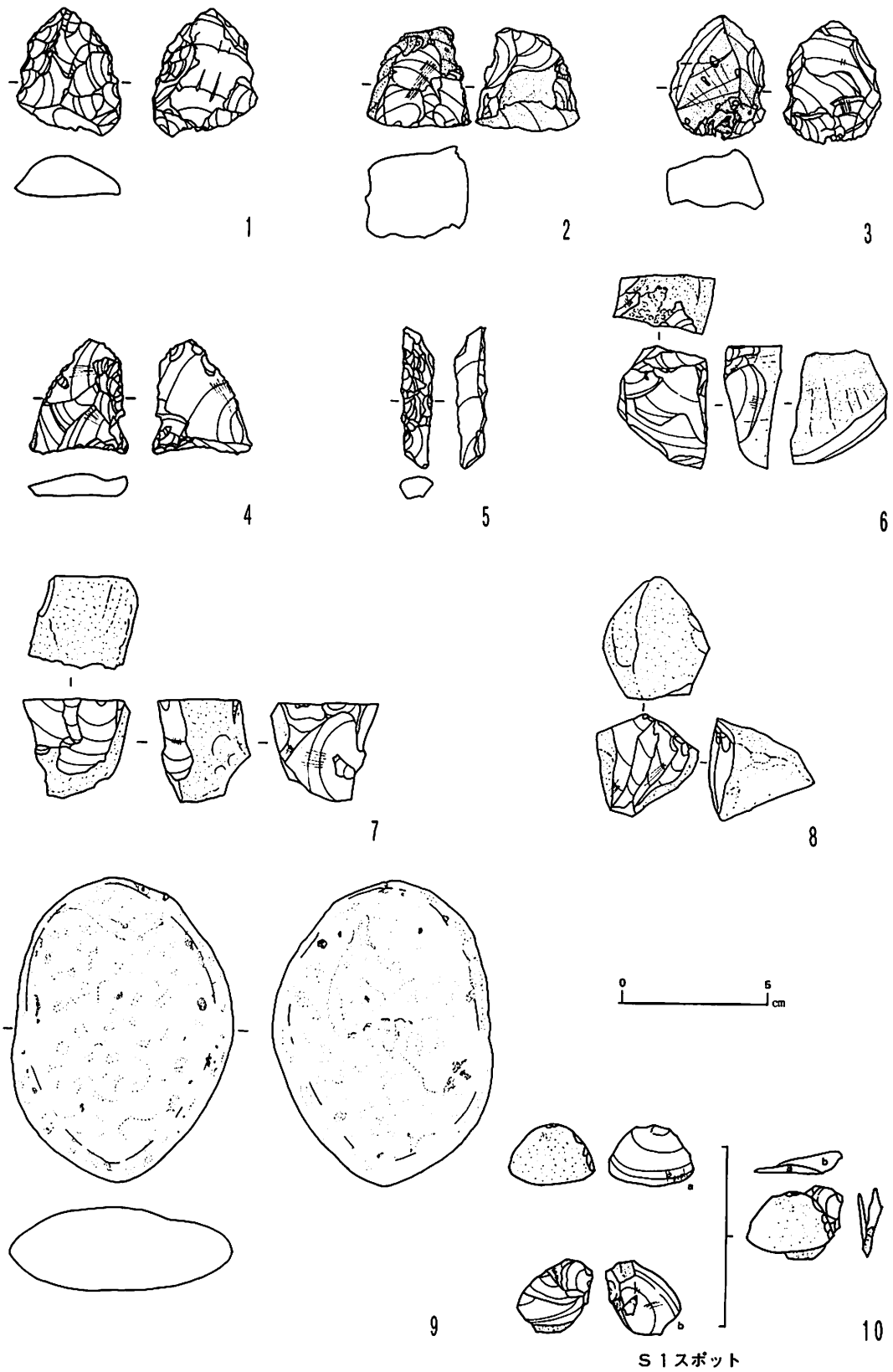
第11図 土壌平面断面図と出土土器



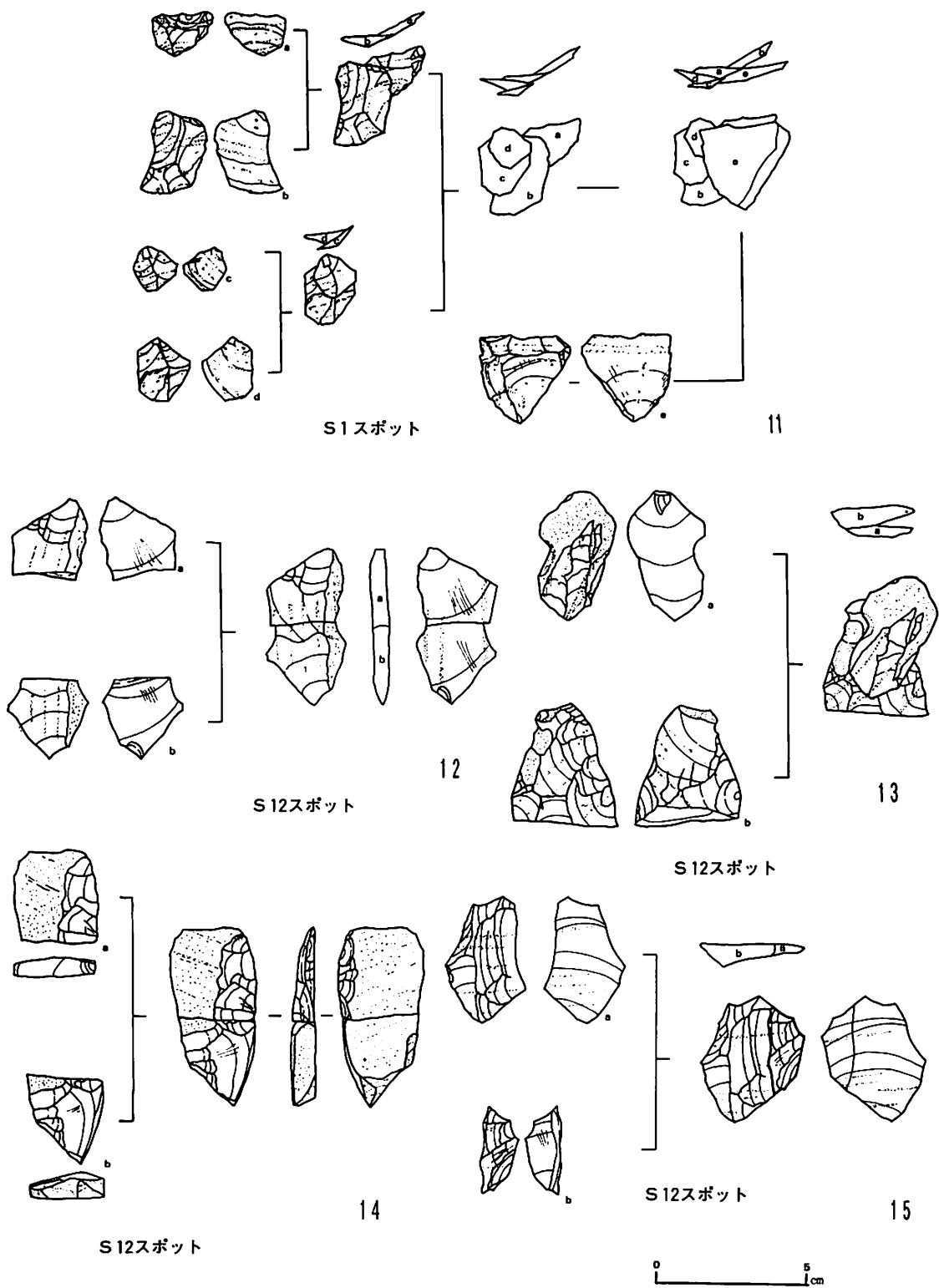
第12図 フレイク集中跡（スポット）状況



第13図 竪穴床面出土の遺物



第14図 竪穴床面遺物とフレイク接合 (S1)



第15図 フレイク接合 (S1・S12)

包含層の遺物

1、土 器

文様上から分類して説明を加えていくこととする。

第1類 刺突文をもち、貼付を有するもの(第16図 №1、3、6)

№1、6は色調、胎土から同一固体の可能性ある。色調は赤褐色を呈し胎土に小石を若干含んでいる。口縁部は断面三角形の肥厚帯を持ち押し引きが2条施され、その直下にも押し引きを配し刺突を加えている。隆帯は細く、その上に押し引きを施している。口縁部内には縄文が見られ、器面には撚りの異なる縄文で羽状に施している。№3も№1とほぼ同様であるが、器面は結束羽状縄文である。

第2類 刺突文をもち、口縁部に押し引きを施しているもの(第16～18図 №2、14～42)

色調は赤褐色を呈し、胎土に小石を若干含んでいる。口縁部は断面三角形を呈し押し引きを1～3条配している。押し引きは1条づつしており間隔の広いものと狭いものがある。また、胴部にも配しているものもある。刺突は器面に垂直に施しているもので、管状、棒状のものがある。器面の縄文は斜行縄文、羽状縄文、結束羽状縄文などがある。内面はよく整形されている。№2は口縁部に押し引き文を配しているが、口縁を一周せず一部のみに見られ、他は斜行縄文を施している。

第3類 口縁部に刺突文のみを施すもの(第18図 №43～50)

色調は赤褐色を呈し、胎土に小石を若干含んでいる。口縁部は断面三角形を呈し斜行縄文を施している。

第4類 縄文のみなもの(第18図 №51～54)

色調は赤褐色を呈し、胎土に小石を若干含んでいる。№51は赤褐色で口唇部を平担にしている。口辺部に原体末端がわかる斜行縄文、胴部には結束羽状縄文が見られる。№52は口縁部に無文帯を持ち、胴部に斜行縄文を地文としている。

第5類 押し引きのみなもの(第16図 №4)

色調は茶褐色を呈し、器高 8.8cm、口径 7.5cm、底径 4.5cmを計る小形の深鉢形土器である。地文は斜行縄文であり、口縁部と胴部に押し引きを平行に配し、その空間を沈線で鋸歯文を描いている。口唇部は平担であり押し引きを施している。底部は底部直上に僅かな張り出しをもっている。

第6類 無文のもの(第18図 №55)

色調は赤褐色を呈し、胎土に小石を含んでいる。口縁部がやや外及する深鉢形と思われる。

その他(第18・19図 №56～76)

口縁部以外の胴部底部破片であり、分類はできないものである。押し引きを口縁部に平行、格子状(№62)に配するもの、結束羽状縄文、斜行縄文、結節縄文等が見られる。底部は胴部から自然にすぼまるものであり張り出しがなく直角状を呈する場合が多く、内面においても底部と胴部の接合は直角状である。

2、石器

形態的に分類して説明を加えることとする。

石 鏃 (第20図 No.1～4)

長さ3cm前後で、細身で基部の短い有茎石鏃である。両面加工で丁寧に作られている。

尖頭器 (第20図 No.5～11)

長さ5～10cm前後のもので、基部が太いもの、柳葉形のものがある。両面加工であり、スクレイパーとしても使用が可能である。

スクレイパー (第20図 No.12～18)

No.12～14は両面加工の石器である。No.13・14は揆形を呈し側面に刃部を有している。剥離は大雑把であり刃部のみ丁寧に作出している。No.15～18は大形の縦長フレイクを利用して側縁に刃部を作出しているものである。表皮に自然面を残している場合が多く小形の原石の周辺を打ち欠きながら縦長フレイクを選定して利用したと思われる。

石 核 (第20図 No.19～26)

原石は黒曜石で角礫状のものと思われる。No.19は上下から剥離をしている角形石核である。No.20～22は石器として加工する途中のものかもしれない。四方から剥離をしており厚みのないものである。No.23～26は自然面を多く残しているもので原石の打点を様々に変えながらフレイクを剥いでいることがわかる。

礫石器 (第21図 No.27～28)

細長く丸みのある礫を利用しているもので、若干の磨耗とともに敲打痕が認められるものである。

小 結

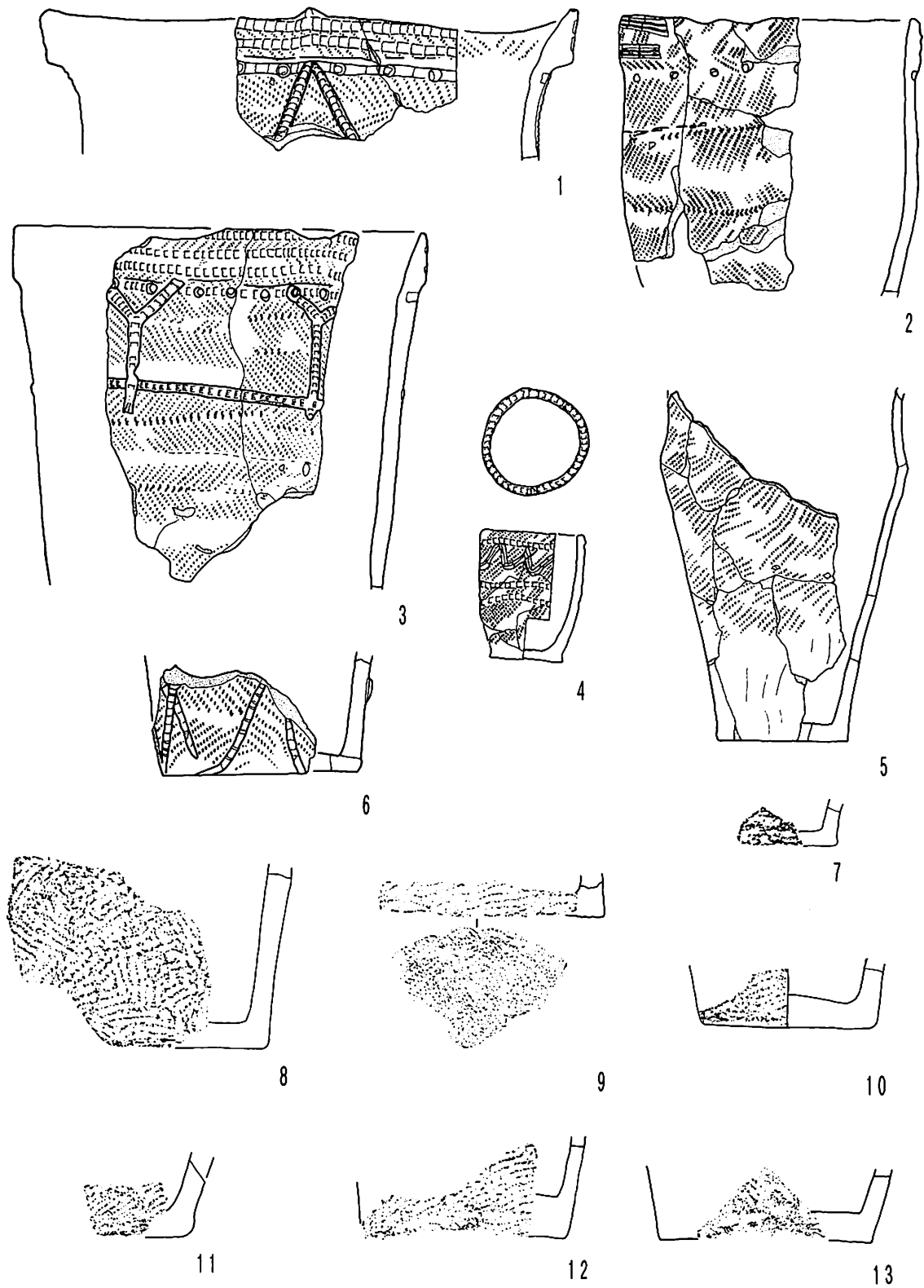
土器の分類についてみると第1～4類までは刺突文を有する点で共通性があり、その点を強調するならば北筒式の範中に入るもので、トコロ6類に併行すると考えられる。従前の北筒式と称されるものは第4類のみで、第1～3類は粘土紐の貼付、胴部の押引き文などは明らかに区別されるべきもので道央部特有の特徴と言えるものである。第4類は口縁部のつくりにおいて断面三角形を呈するもの、丸形のものがあり、前者は第1～4類と共通している。第5類は第1～3類と比較すると押引き文をもつ点で同じであるが文様の構成において相違している。第6類は口唇部が丸く、無文と言うことで他類とは異質と言える。

各類の関連については住居跡、包含層において混在している状況からほぼ同一時期として把握できるものと思われる。

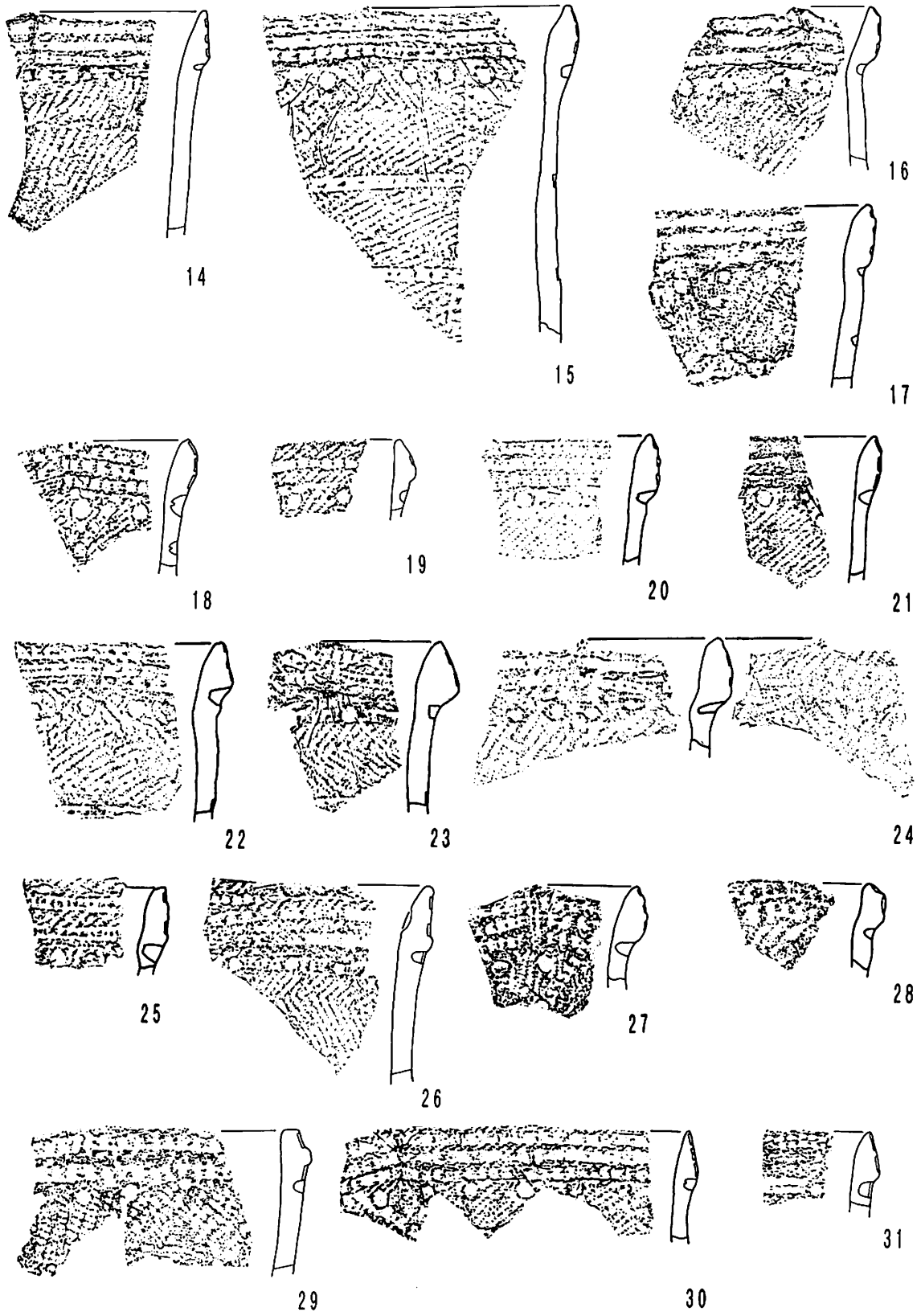
第4類土器を基本として、押引きや貼付を施して特有の土器文様を表現したものと考えられよう。

石器については、図示した程度で、非常に少ない。フレイクスポットを含んでいながら定形品がほとんど無いことは、製品そのものが発掘区以外の地に持ち出されている可能性がある。いずれにしても大量の黒曜石原石が持ち込まれ、この地において石器を製作されたことに疑いない。

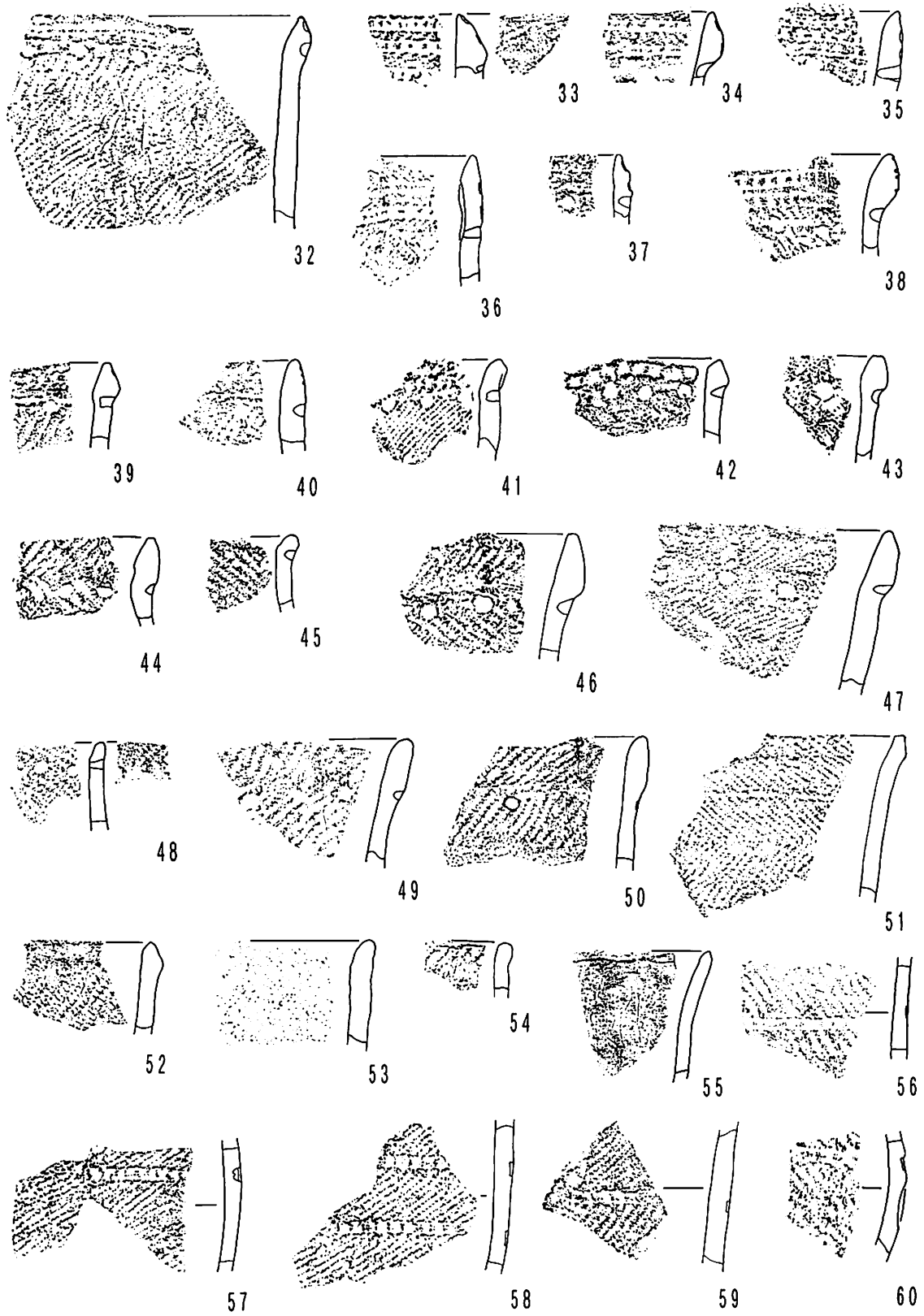
縄文時代中期に見られる石匙と言えるものは無く、フレイクを両面加工したもの、または片面加工で刃部のみを作出しているものばかりであった。



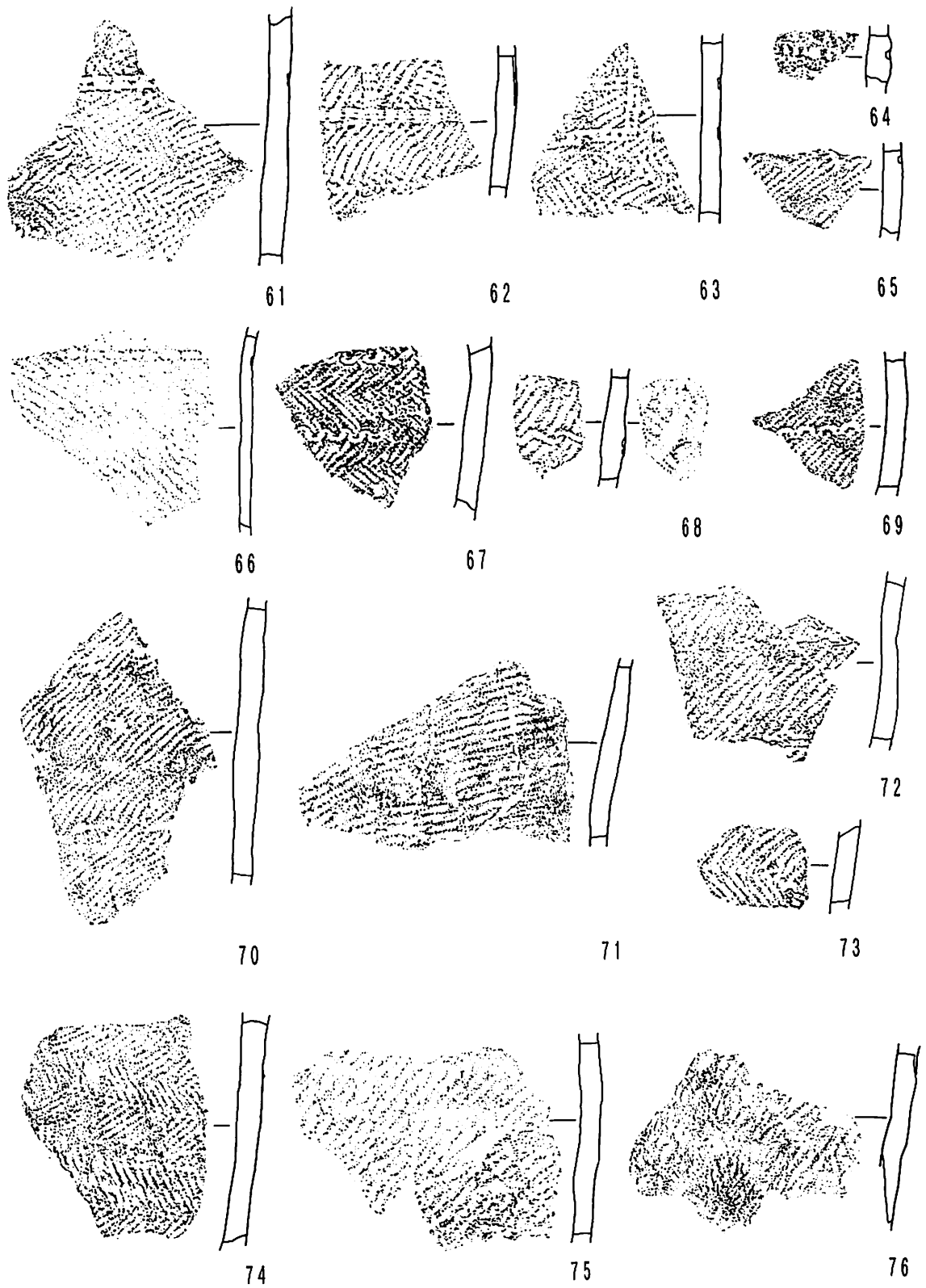
第16図 包含層出土の遺物



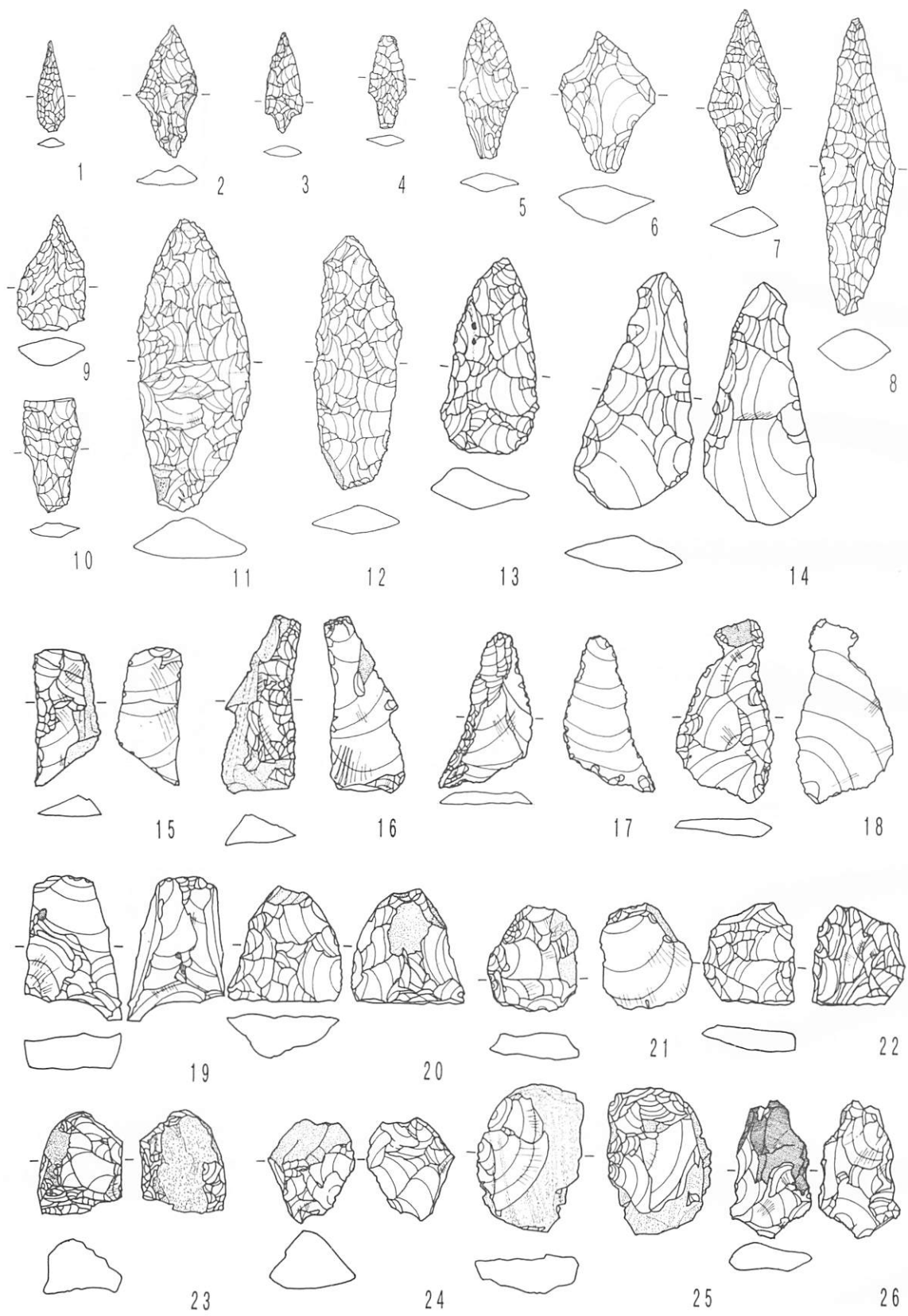
第17図 包含層出土の遺物



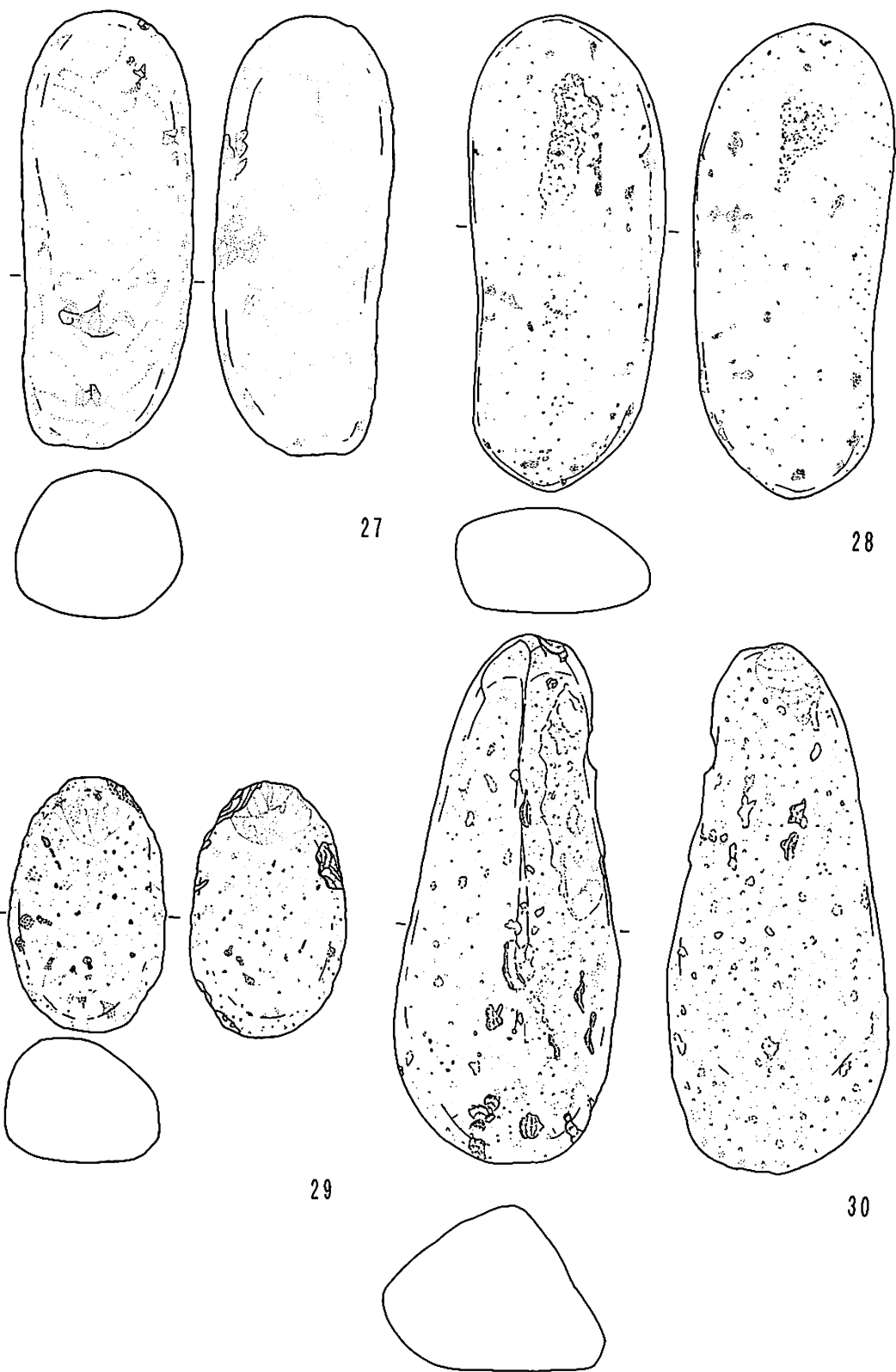
第18図 包含層出土の遺物



第19図 包含層出土の遺物



第20図 包含層出土の遺物



第21図 包含層出土の遺物

第V章 総 括

土器について比較的まとまった資料となっており、町内の発掘された類例と比較する。登町2遺跡(第22図)において多量に出土しており、Ⅱ群B3類(北筒式)が相当する。特徴として口縁部肥厚帯直下に篋状工具や半竹管状工具による押引きが施され、その後、刺突文が加えられている。器厚は比較的薄いものが多い。体部には地文として斜行縄文、結束羽状縄文が見られ、貼付帯や押引き文が施されている。

登町3遺跡ではⅡ群B類に相当するが出土が少なく、口縁部の肥厚帯下に押引きを施す例は少ないようである。

フゴッペ貝塚(第23図)ではⅢ群B3類a類が相当する。口唇部、体部に貼付帯、押引き文、円形刺突文等が多様されている。器形は口縁部にくびれをもち、体部がやや張り出すものとくびれをもたず筒形ないし上半部が開き気味のものがある。体部の文様には貼付帯、押引き、縄文のみのものである。縄文は斜行縄文、結束羽状縄文、綾絡文が施されており、報告書では器形、文様から10に分けている。

上記3遺跡では、いずれも刺突文を有し、押引きを特徴とする一群となっている。特に口縁部が断面三角形の肥厚帯となっており、押引きが1～2条配しており、その直下に刺突文を施すことが文様構成の原則となっている。貼付帯は細い薄いもので押引きが施されているが、量的には少ないようである。縄文においてはフゴッペ貝塚において口縁内面に斜行縄文を施すものが多く見られ、また綾絡文の多様化が多くあると思われる。

編年的位置づけであるが、押引きが多様される点では天神山式に類するが、施文が浅いことや刺突文が加えられる点で、後続するものと言える。しかし後続する土器については定かではないが余市式以前であることは確かであり、縄文時代中期後半と言えよう。

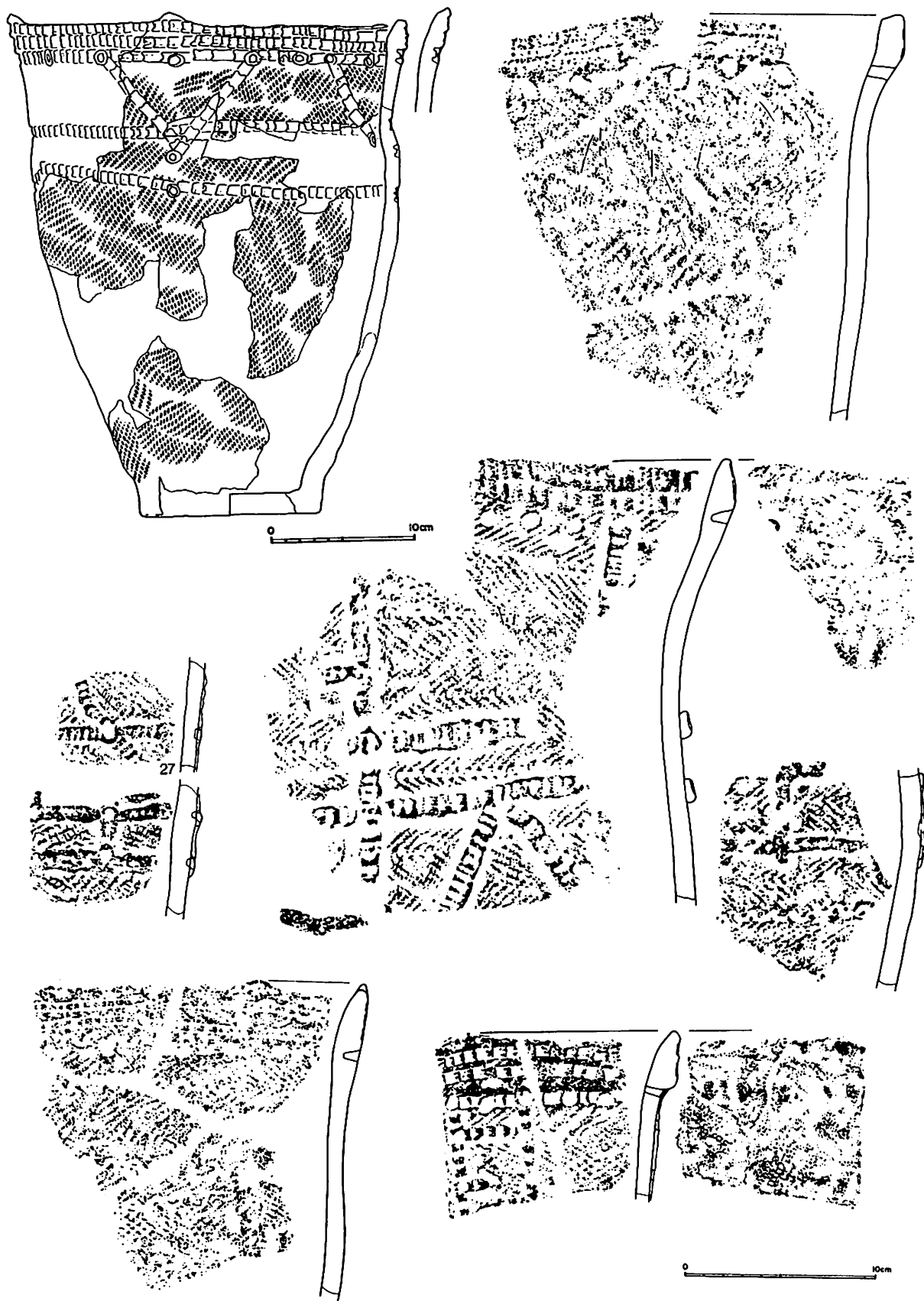
刺突文の点からは従来北筒式(トコロ6類)と総称されているが、余市町をはじめ積丹半島～石狩低地帯に分布している地域性を有する土器群であるため型式として分離できるように思われるが、今後の課題としておきたい。

石器としては製品が少ないが、登町2・3遺跡と比較すると、石鏃は有茎で、尖頭器、スクレイパーなどがある。典型的な石匙と言えるものは伴っていないようである。スクレイパーをみると片面加工のものが多く、原石面を残しているものが多いようである。登川2遺跡ではまとめて石錐が出土しているが今回の調査では発見されていない。

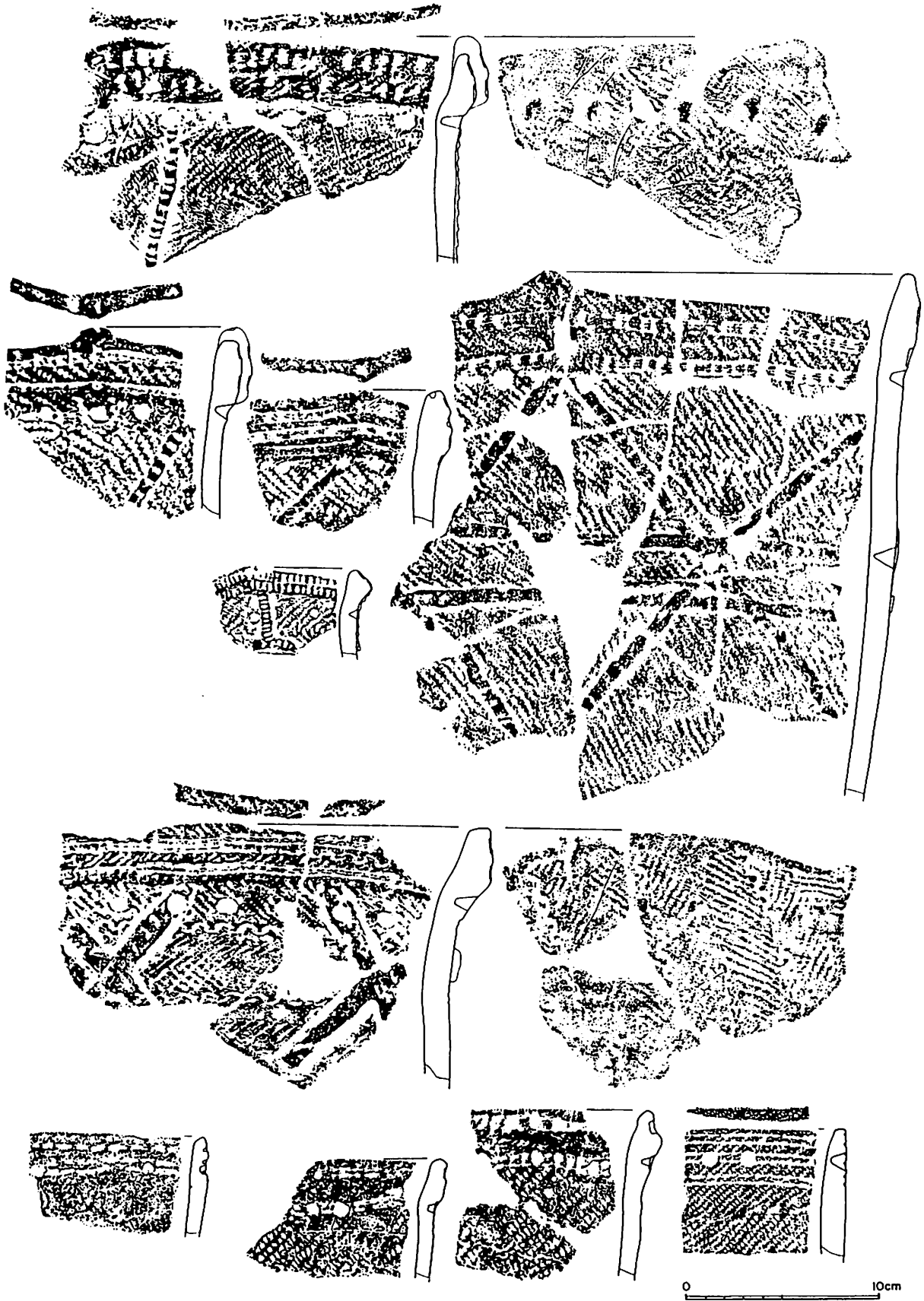
遺構として竪穴住居跡があるが、非常に浅い堀り込みであることから注意するとともに砂丘上のみでなく低湿地のあり方にも今後注目すべきと思われる。

参考文献

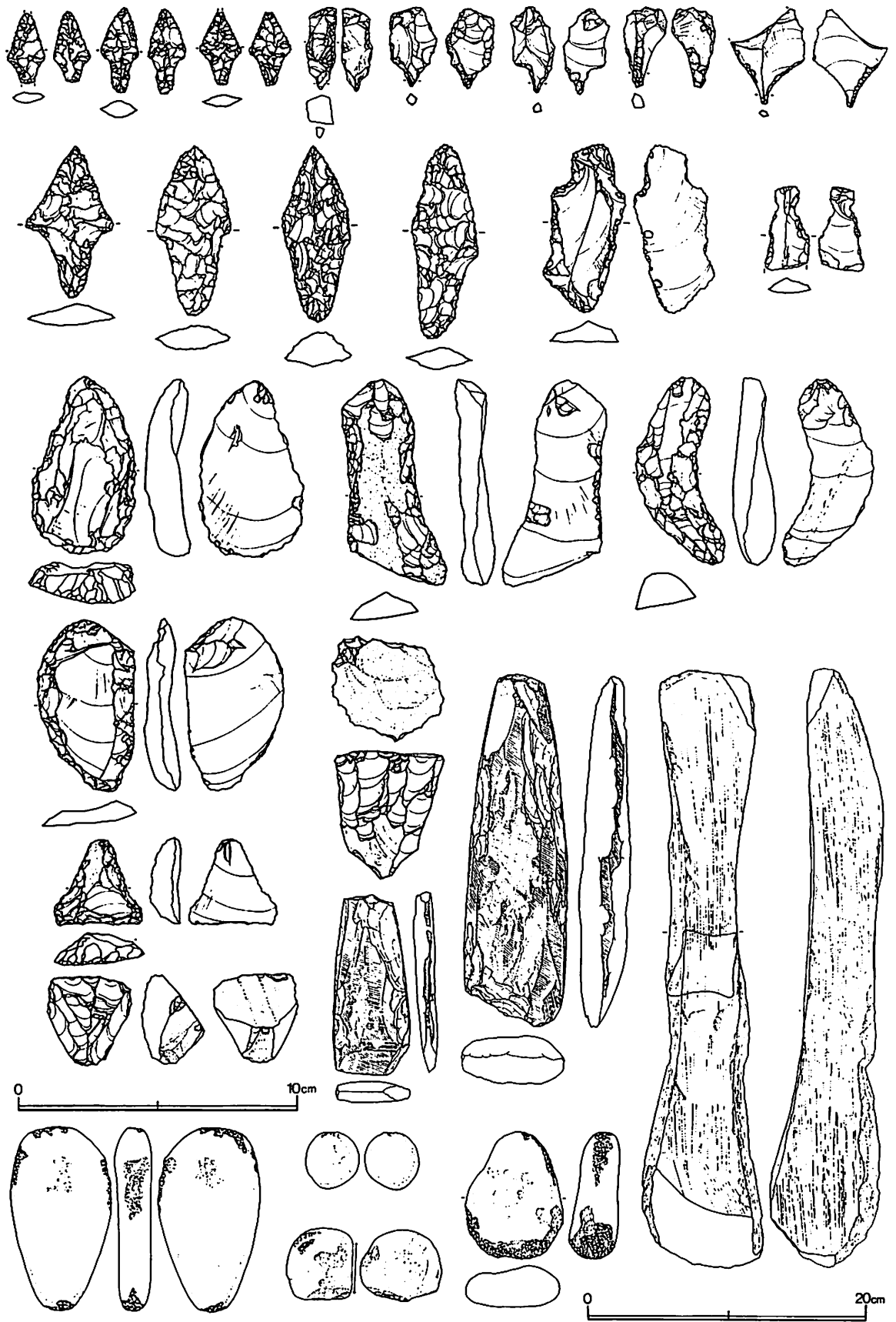
- | | |
|--------------|--|
| 大沼忠春 | 1981『北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について』『考古学雑誌』66-4 |
| 同 上 | 1989『北筒式様式』『縄文土器大観』1 |
| 豊原熙司 | 1981『北海道東部の土器』『縄文文化の研究』4 |
| 北海道埋蔵文化財センター | 1990『登町2遺跡・登町3遺跡』 |
| 同 上 | 1991『フゴッペ貝塚』 |



第22図 登町2遺跡の土器



第23図 フゴッペ貝塚出土の土器



第24図 登町2遺跡の石器

第1表 フレイク集中(スポット)一覧

No	範囲計測 (cm)	出土数	重量 (g)	備考
S 1	6 0 × 5 0	4,420	1,332	4ヶ以上の原石
S 2	6 0 × 5 0	121	84	
S 3	7 0 × 5 0	25	20	
S 4	4 0 × 2 0	67	20	
S 5	9 0 × 2 5	1,450	378	4ヶ以上の原石
S 6	8 0 × 6 0	660	230	
S 7	3 0 × 2 0	50	34	
S 8	3 0 × 2 0	159	99	
S 9	4 0 × 2 5	143	65	
S 10	2 0 × 1 0	248	93	
S 11	7 0 × 3 5	204	118	
S 12	1 1 0 × 5 0	2,672	782	3ヶ以上の原石
S 13	5 0 × 4 0	102	83	
S 14	8 0 × 3 0	125	126	
S 15	3 0 × 2 5	150	43	
S 16	2 0 × 1 0	222	205	
S 17	5 0 × 3 0	345	215	
S 18	4 0 × 3 5	234	209	
S 19	5 0 × 4 5	203	97	
S 20	3 0 × 2 0	204	283	
計		11,804	4,516	1ヶ平均0.4g

第2表 石器実測図一覧

出土地	種類	石質	計測 (mm)			重量(g)	備考
			長さ	×幅	×厚さ		
第14図 No.1	スクレイパー	黒曜石	33	35	13	17.0	竪穴住居跡
2	コア(石核)	〃	33	31	31	33.2	〃
3	〃	〃	38	33	19	24.5	〃
4	〃	〃	36	32	7	8.7	〃
5	〃	〃	46	11	7	3.0	〃
6	〃	〃	42	30	18	34.5	
7	〃	〃	31	31	29	33.1	〃
8	〃	〃	34	32	29	44	〃
9		〃	100	72	27	300.0	〃
10		〃					S-1スポット接合
第15図 No.11	〃	〃					〃
12	〃	〃					S12スポット接合
13	〃	〃					〃
14	〃	〃					〃
15	〃	〃					〃
第20図 No.1	石 鏃	黒曜石	31	9	3	0.8	V層出土
2	〃	〃	46	21	7	4.8	〃
3	〃	〃	34	12	4	1.4	〃
4	〃	〃	36	14	4	1.4	〃
5	石 槍	〃	50	21	7	5.7	〃
6	〃	〃	48	32	11	6.2	〃
7	〃	〃	65	24	10	9.3	〃
8	〃	〃	104	26	14	28.7	〃
9	〃	〃	40	24	10	8.0	〃
10	〃	〃	39	21	5	4.1	〃
11	スクレイパー	〃	102	39	14	50.0	〃
12	〃	〃	89	29	10	29.0	〃
13	〃	〃	69	35	14	26.9	〃
14	〃	〃	84	40	11	21.3	〃
15	〃	〃	48	23	7	6.7	〃
16	〃	〃	61	26	10	13.4	〃
17	〃	黒曜石(朱附着?)	51	35	5	7.2	〃
18	コア(石核)	〃	62	35	6	11.0	〃
19	〃	〃	50	35	13	23.3	〃
20	〃	〃	39	39	16	24.9	〃

第2表 石器実測図一覧

出土地	種類	石質	計測 (mm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
21	コア(石核)	黒曜石	38	32	9	11.2	〃
22	〃	〃	32	35	16	15.1	〃
23	〃	〃	34	29	19	23.6	〃
24	〃	〃	37	27	20	16.0	〃
25	〃	〃	52	36	14	27.3	〃
26	〃	〃	49	26	10	13.5	〃
第21図 No.27	すり石・敲石	安山岩	142	55	48	470.0	〃
28	〃	〃	155	63	35	460.0	〃
29	〃	〃	83	51	40	213.0	〃
30	〃	〃	171	71	54	690.0	〃

写 真 图 版



(S→N方向)



(N→S方向)

遺跡の全景

第2図版

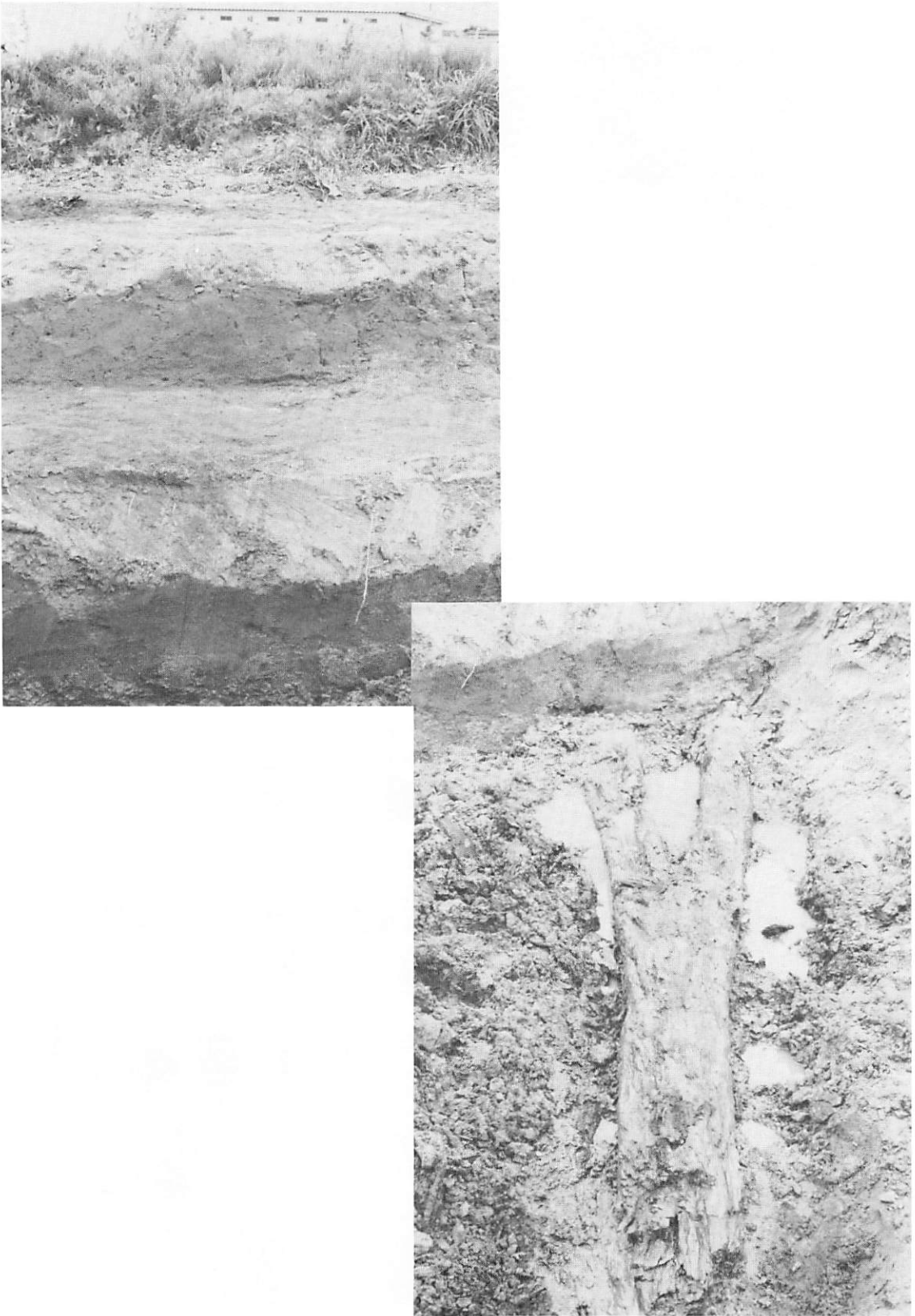


(S→N方向)



(S→N方向)

発掘風景

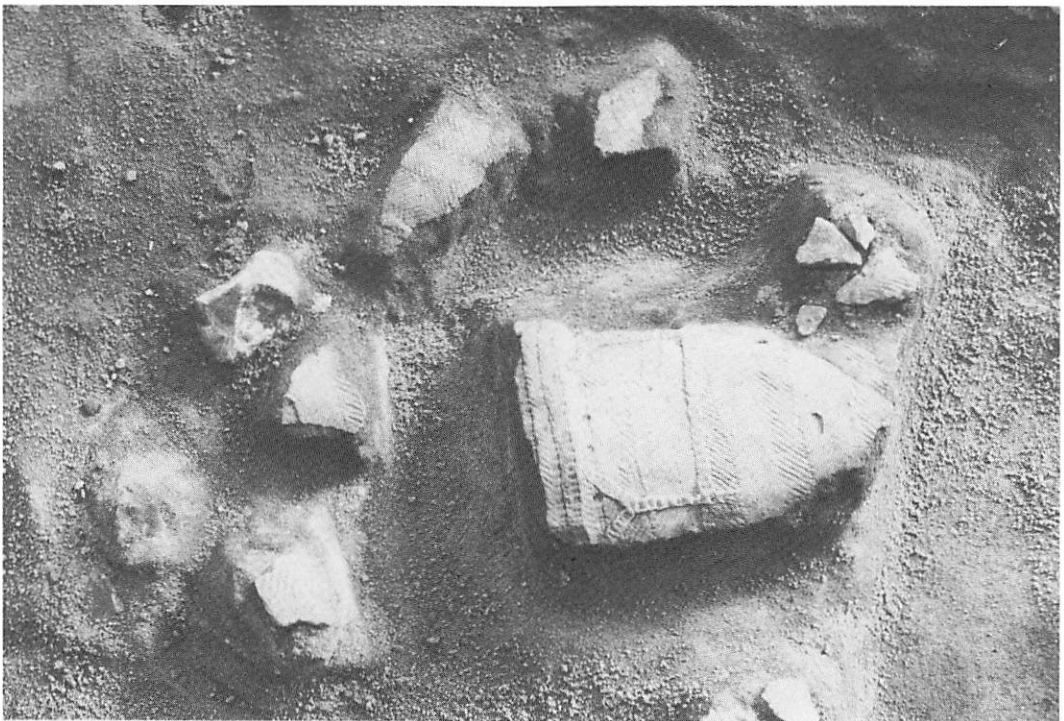
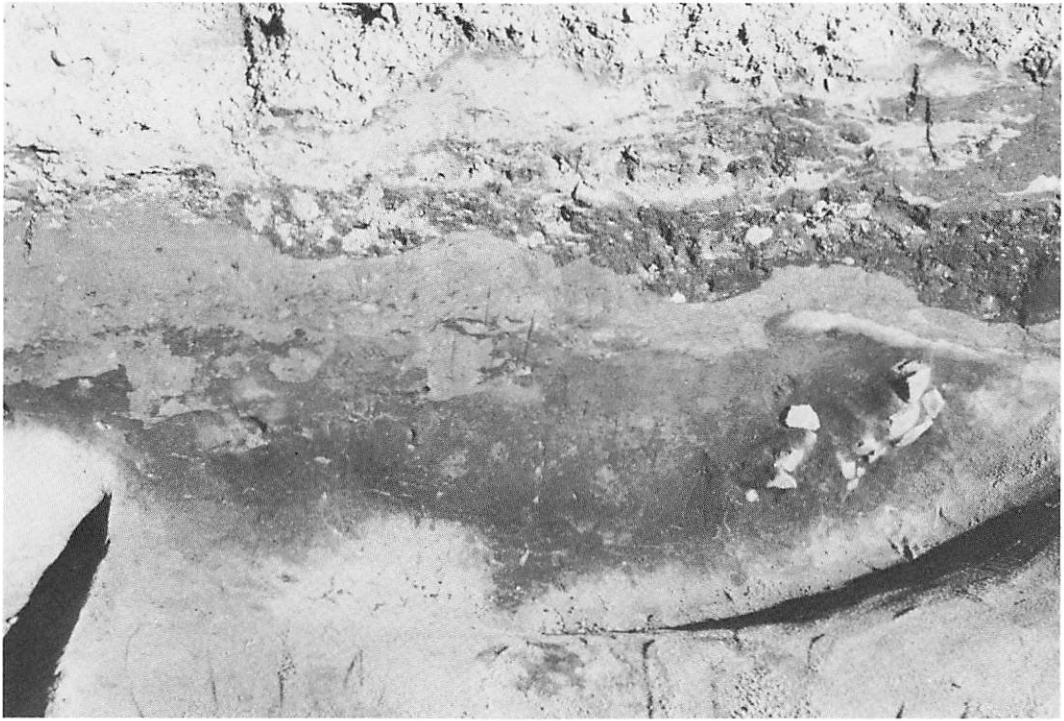


土層断面と湿地出土の樹木

第4図版



竪穴住居跡(上)と遺物出土状況(下)



土壙（上）と遺物出土状況（下）

第6図版



フレイク集中跡 (スポット)

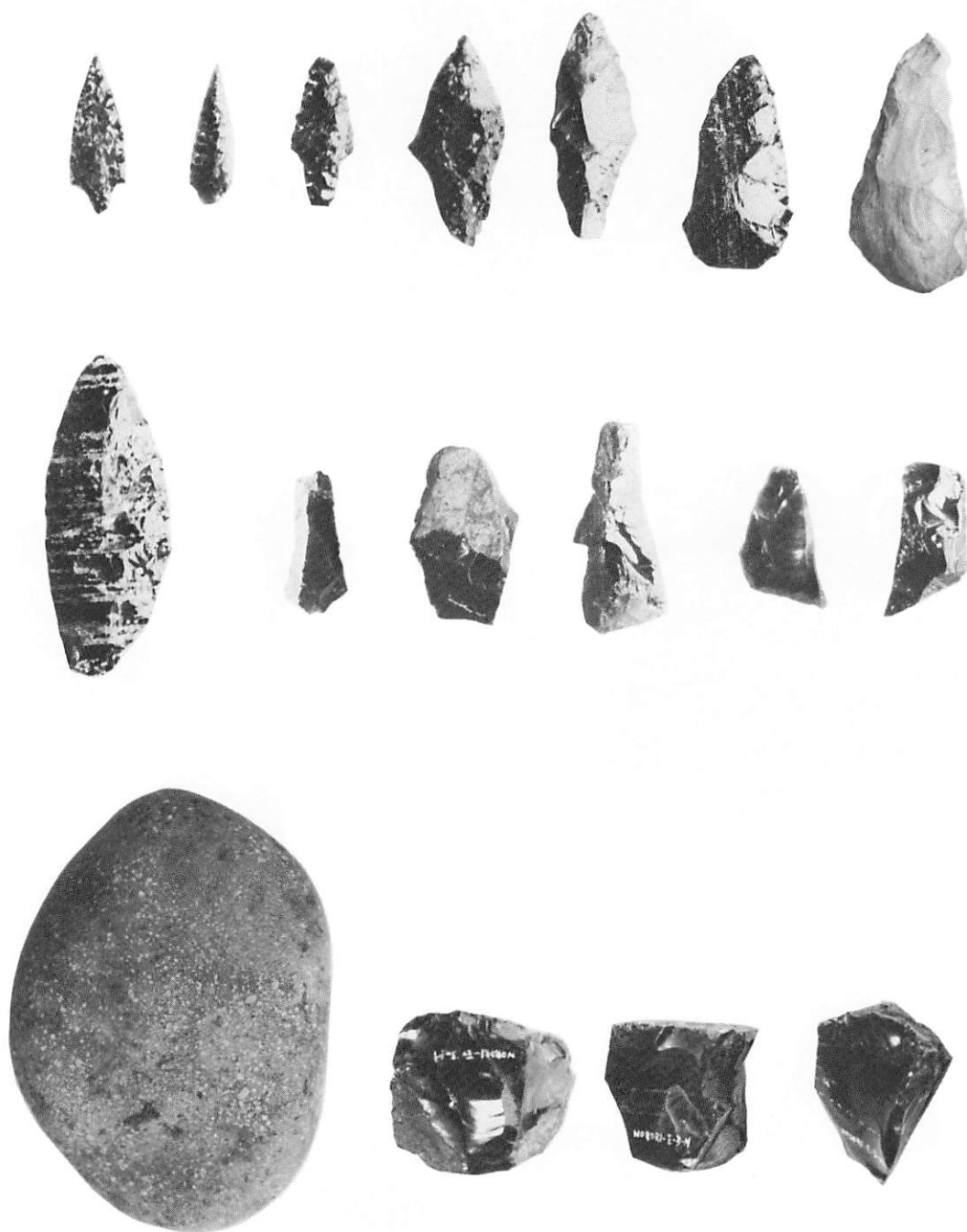


出土遺物（第1～2類土器）

第 8 図版



出土遺物（第 3 ～ 5 類土器）



出土遺物 (石鏃.石槍.スクレイパー.擦石.コア)

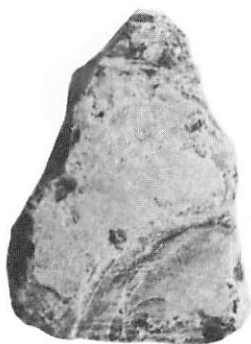
第10図版



スポット5 (S5)



スポット12 (S12) と接合フレイク



赤井川で採集した原石

出土遺物 (スポットと参考資料)

報告書抄録

ふりがな	よいちちょうのぼりかわうがんいせき							
書名	余市町登川右岸遺跡							
副書名	余市町大浜中登線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	乾 芳宏							
編集機関	北海道余市町教育委員会							
所在地	〒046-0015 北海道余市郡余市町朝日町26番地 TEL0135(21)2111							
発行年月日	西暦1998年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
	所在地	市町村	遺跡番号					
のぼりかわうがん 登川右岸 いせき 遺跡	ほっかいどうよいち 北海道余市 郡余市町 のぼりちょう 登町1他	01408	D-19-56	43° 11' 8"	140° 49' 10"	1997. 8. 1) 1997.10.31	980 m ²	緊急
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
登川右岸遺跡	包蔵地	縄文時代 中期	住居跡 剥片集中跡 土壙	縄文土器 石器		多量の黒曜石フレイクが集中的に発見された。石器製作跡と考えられる。		

1997年度 余市町登川右岸遺跡
大浜中登線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 余市町教育委員会
〒046-0015
北海道余市郡余市町朝日町26番地

発行日 1998（平成10）年3月25日

印刷 商工社 久留宮印刷
北海道余市郡余市町大川町4丁目98番地
